こいねこ

北島夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こいねこ

【Ｎコード】
Ｎ３３０２Ｚ

【作者名】
北島夏

【あらすじ】
幼いころに両親を失い、いつもふたりきりで過ごしてきたナオとみなも。
ある日突然、みなもの手が、猫の手に変わってしまいます。
あわてるナオとは反対に、みなもはというと、かわいいかわいいとのんきなもの。
ためいきをつくナオですが、そんなナオにも驚くことが起きます。
片思いの女の子にいきなり告白をされたのです。
クリスマスが近づく冬の日々を舞台にした、淡い恋物語です。

1／20

（1）

「かき揚そばと季節のご飯セット」
「だめだよぉ。ナオちゃんはカレイの煮つけご飯だよぉ」
「魚嫌いなんだよ」
「でも順番だもん。順番守らないとわたしがカレイの煮つけご飯だよぉ」
「好き嫌いは良くない」
「ナオちゃんだって。えへへ、わたしは、かき揚そばと季節のご飯セット〜♪」
「むー」
ここに来たときには毎回座るいつもの席。店員さんを呼んで、注文を済ませる。
しょうがない。嫌いだけど今日は魚だ。好き嫌いしていたら、このファミレスの全メニュー制覇なんてできないしな。
デザートに紅茶のシフォンケーキを追加してご機嫌のみなもから目を移して、窓の外を見る。
町はクリスマスカラー一色だ。緑と赤と白。通りの並木にはいろとりどりの電飾がまたたき、商店街の店先やショーウィンドウにはクリスマスツリーが飾られ、サンタやトナカイ、ふわふわの白雪のイラストや小物がにぎわっている。店から出て、通りを駅のほうにずーっと見晴るかせば、もちろん、何百万ドルの、とはいかないけど、思わず見とれてしまうクリスマスイルミネーションが続いているはずだ。
「……クリスマスだなぁ」
「クリスマスだねー」

いつの間にか、僕と同じく窓の外を眺めていたみなもが、セミロングのふわふわくせっけをゆらして、僕の何気ないつぶやきに同意する。

あいかわらずのにこにこおっとり口調。子供のころからずっとみなもはこんな調子で僕のとなりにいる。子供のころって言うか、生まれたときから、だな。僕とみなもは同じ日に同じ病院で生まれた。そしてとなり同士のベビーベッドに寝かされたのだから。

ほんと、くされ縁。いつまで続くんだろうね、僕たちは。

窓からみなもに顔をもどし、そんなことをふと考える。

みなもも窓から目をもどし視線が合うけど、べつに、なあに？とも訊いてこない。

とくになにか言いたくて見ていたわけじゃないことなんて、お互い目を見れば一瞬でわかるから。

……なんだかもう熟年夫婦の域だけど、でもそれも当然かな。

お互いもう両親を亡くしてから何年も経つ。それからずっと、ふたりだけの家族のようにして育ってきたんだから。

「クリスマス、今年はナオちゃんち？」

「うん。去年はみなもんちだったからね」

家族のように、兄妹（僕のほうが三十分くらい先に生まれた）のように育ってきたから、クリスマスも毎年一緒だ。となり同士の家だから、どっちでパーティをやっても変わらないのだけど、いちおう交代交代、お互いの家で開いている。ささやかな代わり映え、かな。

「チャンスだよ！　クリスマスなんてこのうえなくいい機会なんだから、告白しなよ。いまのまんまじゃ話だってまともにできないんだよ？」

背中越し、となりのとなりくらいに離れた席から威勢のいい声が聞こえてくる。女の子の声。きっと僕たちと同じくらいの年頃の。話し相手の子の声は喧騒にまぎれて僕の耳までは届いてこない。

「わたしもがんばるから。ね、一緒にがんばろっ！」

そんな会話が続いている。
ファミレス店内を見まわすと、もうすぐクリスマスなのが関係あるのかないのか、いつもは家族連れが多いのに、今日は恋人同士っぽいカップルがけっこうちらほら。意識してみれば、そういえばこのところずっとカップル率が高かった気もする。
クリスマスイヴって、そういえばそういうイベントの日なんだっけ。
僕にとってはいつもみなもとささやかなプレゼント交換をして、ちょっとおいしいものを食べる日なだけで、どきどきする出来事なんかとは無縁なのだけど。
「……クリスマスってさ」
「クリスマス？」
僕の目を見直して、小首を傾げるみなも。
と、そこで僕は、うーんと考え直す。
みなもとクリスマスカップルや恋愛の話？
照れくさくて、無理無理。
「んー、やっぱりいい」
「むう。あ、かき揚そばと季節のご飯、来たー」
途中で話をやめた僕に一瞬不満そうな顔をするけど、すぐに運ばれてきた料理に気をとられるみなも。
「ナオちゃんにも分けてあげるからね」
「みなもにも煮つけ分けてあげるよ」
「それはいらないよぉ」
僕のカレイの煮つけも運ばれてきて、いつもと同じ、ふたりで味見をしあいながらの食事が始まる。いつもどおり、これがおいしいあれがおいしい、これもらうな、あ、だめだよぉ、なんて話しながら。
でもクリスマスかぁ。
僕にだって気になっている子がいないわけではないけど、今年もいつもと同じ、みなもとふたりきりのクリスマスなんだろうな。

「あ。猫さんだよ、ナオちゃん」
やっぱり連日のファミレス通いってお金かかるよなぁなんて思いながらの帰り道、街路灯に照らされた民家の塀のうえに白い猫を見つけた。
大通りからはずれた住宅街の道筋。静かな夜に白い毛並みは輝くようでとても綺麗だった。
姿勢よく座って闇夜のどこかを見つめていた白い猫は、僕たちが立ち止まると、恐れて逃げることもなく、こちらを向いて、にゃあ、と鳴いた。
「かわいいよぉ、ナオちゃん。こんばんはー、猫さん」
僕にぱあっと笑顔を向けてから、みなもは猫に歩み寄る。
みなもがそっと手を近づけると、猫はぺろっと舌先でなめる。
「きゃう。かわいいかわいいかわいいよぉ！」
「猫だからねー」
「猫さんだからかぁ。ふわぁ、もうもうもうもうかわいいよぉ！」
白猫は人慣れしているのか、目を細め、ごろごろと喉を鳴らして、みなもに撫でられるがままになっている。「にゃんにゃん。にゃにゃ？　にゃあーん」
「なんだって？」
ご機嫌に猫語を操るみなもにのってあげる。
「魚嫌いはだめだよ、って」
「それはみなももだろ」
そんなことを話していると、白猫は、ふ、と誰かに呼ばれたように闇に沈んだ路地の先に顔を向ける。そしてあっという間に身をひるがえして、僕たちの前から去ってしまう。
「行っちゃった」
「行っちゃったね」
僕は少しの間、猫の消えた闇を見つめていた。夜の白猫なんて、

なんだかちょっと幻想的な光景だったな、なんて思いながら。
みなもはというと、ぽーっとした表情でやっぱり猫の消えた闇を見ていた。みなもがぽーっとしているのはよくあることだけど。……と思っていたら、急に、
「猫さんはいいなぁ」
とぽつりともらす。遠いどこかを見ているような、夢見ているような、そんな声。
なんだろう、とちょっといつもとちがうみなもを感じた気がしたけど、僕はコートの襟を正しながら、その言葉を聞いてまず思ったことを率直に言った。
「……いまの季節、寒いと思うけど？」
さっきの猫、首輪がついてなかったけど、寒い冬の夜はどうやって過ごしているんだろう。
「ううん。いつでもこうしていられるから、寒くないんだよ」
そう言って、みなもは僕のポケットのなかに冷たくなった手を入れてきて、僕の手を握る。
「わ。冷たっ」
「心があったかい証拠なんだよぉ」
にぱぁとなにがそんなにうれしいのか、しあわせそうにみなもは笑う。
「ずーっとこうしていたいなぁ」
「なに言ってんだか」
ずっとこうしてきたでしょーが。いつもふたりで。
結局、猫のことがうらやましいのと手をつなぐことになんの関係があるのかはさっぱりわからなかったけど、だんだんぬくぬくとしてきたみなもの手はあたたかくて、僕たちはそれからずっと手をつなぎながら、家まで帰った。

（2）へ続く

2／20

（2）

翌日、一二月一九日、驚くことが二つも起きた。

ひとつは朝。

登校準備を整え、いつもどおりに家の前で待っていると、普段よりも少し遅れて家を出てきたみなもが、開口一番、こう言った。

「ナオちゃん、ナオちゃん！　手が猫になっちゃったの。にゃん♪」

そう言うみなもの左腕には、肘から指先まで、包帯がぐるぐると不恰好に巻いてある。

「さ。急がないと学校遅刻するよ」

みなもは学校に向かってさっさと歩き出そうとする僕の手を右手でひっぱって、もう一度言う。

「手が猫になっちゃったの。にゃん♪」

しつこいなぁ。

しょうがないので僕は黙って、みなもの左腕の包帯を解く。

と。

にゃ～ん。

「……え。なにこれ」

そこには、猫の手があった。

「猫の手だよ」

そう。

猫の手だ。

薄茶色のふわふわした毛並みに、やわらかそうな桃色の肉球のついたまるっこい指先。

まぎれもなく、猫の手。
僕はもう一度繰り返した。
「え。なにこれ」
「猫の手だよ」
みなもも繰り返す。
らちがあかない。
「いやだから、そうじゃなくて、どうしてこんなことに？」
おもちゃかなにかをはめてのいたずらではないのは、一目でわかった。だって肘から上のきめこまやかなみなもの肌との間に、継ぎ目がない。そもそもこれがおもちゃだったとするなら、それをはめたみなもの腕は、いまどんな風に変形しているのだろう。そんな変形、人としてありえない。だから、これは本物だ。
手にとって握ってみると……あ、ふわっとして、あったかくて、気持ちいい。思わずふにふにと握ってしまう。
「あん、くすぐったいよぉ」
くすくすと笑うみなも。
自分の手が猫になっているというのに、焦りも緊張感も、まったくない。
みなもらしいけど、ここはびしっと言う。
「みなも」
少し強めに名前を呼ぶ。
「なあに？　ナオちゃん」
僕がせっかく真面目な声を出しても、みなもはきょとんするだけだ。まあ、話を聞いてくれるならいいけど。
「みなも。どうしてこんなことになっているの？」
あらためて訊く。
みなもは、ん～、と考え、
「猫さんになりたい、って思ったから？」
聞き返されても困るけど。そもそも。
「思ったからって、普通そんな簡単に猫にはなれないでしょ」

苦労すればなれるってものでもないだろうけど。
「うーん。そっかぁ」
「いつ、こうなったの」
「朝起きたらね、猫さんになってたの」
くいくい、と猫招きをしてみせて、楽しそうに言うみなも。
「なにか思い当たる節はないの？　そう、なっちゃったことに」
「んー、だから、猫さんはいいなー、なりたいなって」
「それ以外に。魔法とか、変な薬飲んだとか、なにかの呪いとか」
なにばかばかしい単語並べてるんだ僕は。と思いながらも、でもこれってあきらかに普通じゃない。本当に、みなもの手が猫の手になっているのだから。
だから、そのばかばかしい単語も、僕は真面目にくちにしたのだけど、
「呪いは怖いよぉ。お星さまにお願い、とかのほうがかわいいな」
とみなもは、ずれた反応を返してくる。
みなもとの話が脱線しがちなことはいつものことなので、僕は気にしない。
「猫にいじわるしたりしなかった？」
「むう。するわけないよぉ！　猫さん、大好きだもん」
知ってるでしょお？　と僕にすねた目を向けるみなも。
うん、たしかに知ってる。僕とみなもは猫が大好きだ。飼ったことはないけれども、昔から、道端で見かければ必ず足を止めて、話しかけたりおやつをあげたりしてきた。
「そうだよね。じゃあ、なんでだろう。……っていうか、さっきからなんでそんなにのん気なの！」
自分の身体の一部が人外になってしまったというのに、みなもはむしろご機嫌だ。さっきからにこにこしながら、自分の猫手を曲げたり伸ばしたり、てのひらを開いたり閉じたりして遊びながら話している。そう言えば開口一番、にゃん、なんて言ってたっけ。
僕が、む、とにらんでもみなもは、

「だってかわいいよ？」
くいくい、と招き招き。
どんなときでものん気なのはみなもの長所でも短所でもあるんだよな。
僕は、はあ、とため息をひとつつくと言う。
「でも困るでしょ。それじゃあ」
「困るかな？　あ。鉄棒の授業のときは困るね。鉄棒、掴めないから、逆上がりのテストに落ちちゃうよ」
鉄棒。それはたしかに困るだろう。高校の授業に逆上がりのテストはないと思うけど。
でもそんなことじゃなくてさ。
「誰かに見られたら困るでしょっ。すぐにうわさになって、保健所に連れて行かれちゃうよっ。……もしかしたら政府に捕まって、解剖されちゃうかもしれない」
僕が脅かすように言うと、みなもはぷくうっとほおをふくらます。
「そんなにばかじゃないよぉ。だから包帯巻いてきたんだもん。ナオちゃん以外には見せないからぁ、だーいじょーぶ」
そう言いながら、にゃんにゃん、と招き猫。
「左手は人招き～♪」
「だからなんでそんなに緊張感がないのさ……」
言ってもしょうがないこととは思いつつ、僕はまたもため息。
「んー。猫さんになるのもいいかなって」
「いいわけないでしょ！」
「かわいいのに……」
しゅんとなるみなも。
まったくもう。
まあ、たしかにかわいいけどさ。
と、そこでふと思った。
「ねえ。猫になったのは左手だけ？　脚……は大丈夫そうだね。尻尾とか生えてない？」

脚は、いつもどおりのほそっこいのがスカートの裾からのぞいている。でも服のなかまではわからない。
「んー、大丈夫だよ。ほら、尻尾は生えてないよ」
そう言いながらみなもはスカートをめくってみせる。
うすピンク色の布地がちらっと見える。
「はしたないからやめなさい」
すぐにスカートを元にもどさせる。
まったく。僕が相手だと羞恥心働かないんだから。
今日何度目かのため息を僕がついていると、ふいにみなもが言う。
「ねーね、ナオちゃん。もうそろそろ学校行かないと、遅刻だよ？」
あ、忘れてた。
じゃなくて！
「そんなことよりも、その手のほうが問題だよ」
「包帯巻いておけば大丈夫だよぉ。ほら、ナオちゃんナオちゃん」
「あ、うん」
人通りはないとはいえ、いちおうここも往来だったのを思い出して、言われるままに包帯を巻くのを手伝う。
「さ。今日も元気に、がっこ、いこー！」
包帯を巻き終えると、たぶん怪我をしたって言い訳をするのだろうに、その左手を、おー、とふりあげて、スキップをするように歩き出すみなも。
「いや、だからさぁ！」
人間の手が猫の手になってしまうってことがどれだけ異常なことか、みなもは本当にわかっているんだろうか、とても怪しかった。

その日、たしかに包帯を巻いていればとりあえず問題はなかった。さいわい、僕とみなもは同じ二年A組。授業中のノート取りをしてあげることもできたし、心配するクラスメートたちには話をあわせて説明することも出来た。

ちなみに包帯の訳は、家の階段から滑り落ちて筋を違えてしまったことにしておいた。骨折、なんて大げさな理由にしてしまったら、腕が元にもどったあとが面倒だったから。すぐにみなもの腕がもとにもどるなんて保証はもちろんなかったけど、当の本人であるみなもがのん気なものだから、あまり深刻になれなかったというのもある。　よく考えてみれば、いや考えてみなくても、とんでもないことが起こっているのに……。

驚いたことのもうひとつは、放課後に起きた。

女の子に告白されたのだ。

しかもその相手は織部ちかさんだ。

僕やみなもと同じクラスの織部ちかさんは、僕がほのかに想いを寄せている相手、つまり片思いをしている女の子だったのだ。

背が低すぎるわけではないけど全体的に小づくりで小動物ちっくな織部さんには、活発なイメージはない。声の大きな元気な女の子が多いうちのクラスでは、おとなしくてあまりめだたないポジションにいると思う。でも暗いわけじゃなくて、いつもおだやかに笑っている子で、さりげない気配りが上手な子だ。週番が忘れがちな花瓶の水の入れ替えをしょっちゅう代わりにやっているのを僕は知っているし、化学の実験のときに他班がかたづけ忘れたビーカーを棚にもどしてあげたり……ってこれじゃまるで僕が織部さんの行動を逐一観察しているストーカーみたいだけど、ともかく、ふと見るととくに誰に告げることもなくさりげなく心遣いをしている少女なのだ。そんな織部さんを見ているうちに、いい子だなと思い始めて、いつのまにか僕のなかで気になる女の子になっていた。　その織部さんに告白されたのだ。

好きです、って。

つきあってくださいませんか、って。

放課後の屋上で、肩のところで切りそろえたまっすぐな黒髪をゆ

らし、真っ赤な顔をした織部さんに。
そのとき僕は、ぽかん、としてしまった。
放課後お時間ありませんか、と聞かれたときに、まさか、と思ってどきどきはしていたのだけど、本当にその言葉を聞いたときには、なんだかぽーっとしてしまった。
その次に僕は混乱した。
僕はそのときまで、織部さんとはほとんどくちをきいたことがなかった。
だから、直接僕に向けられた織部さんの透明な声がすごくかわいくて感動してしまって。それから、どうして僕なんかを好きになってくれたんだろうってわからなくて。
そしてわからないながらも、好きな女の子からの好きですって告白に僕の頭には血が上ってしまって、顔がかっと熱くなる。
「あ、あの。急に変なことを言ってごめんなさいっ」
僕が言葉を返せずにいると、ますます赤くなりながら織部さんが頭を下げた。
「え、あ、ううん。こっちこそ、ごめん！」
ごめん、という言葉に、織部さんが固くなるのがわかったので、あわてて言葉を続けた。
「あ、そうじゃなくて、えと、急だったからびっくりして、それで言葉が出て来なくて、そのことを、ごめん、って」
焦った僕は、しどろもどろになりながら言い訳をした。
「そ、そそそうでしたか。その、そうですよね。急ですよね。えと、その……」
織部さんもしどろもどろになりながらそう答え、そこで、くちごもってしまう。
「……」
「……」
どうしていいかわからず、二人無言で立ち尽くしてしまう。
って、ちがうちがう！　織部さんは気持ちを伝えてくれたんだか

ら、今度は僕が返事をする番なんだ。内気そうな織部さんがこんなにがんばってくれているのに、僕はなにをもたもたしているんだ。返事を、返事をしなくちゃ！

「えと、その、ぼ、僕の気持ちは――」

そこまでくちにしたところで、織部さんが緊張に耐えられなくなったようだった。

「あ、あのっ。そ、そのっ、きゅ、急でしたから、そのっ、返事はいまじゃなくてもっ」

ちらちらと屋上の入り口を見ながらいまにも泣き出しそうな顔で織部さんは言う。

「え、でも僕は織部さんのこと――」

「ごめんなさいっ！」

がばっと頭を下げると、織部さんは入り口に向かって走り出してしまった。

一瞬あっけにとられたけれども、織部さんが入り口に姿を消す前に、急いで言う。

「織部さんっ、ありがとうっ！」

僕の声に織部さんはドアの前で立ち止まり、ぺこりともう一度頭を下げた。

それからすぐに、逃げるように織部さんはドアのなかに入ってしまったけれど、頭を上げたときの織部さんは、目は涙でにじんでいたけど、くちもとにはちいさな笑みを浮かべてくれていた。

（3）へ続く

3／20

（3）

「ナオちゃん、またお魚料理だねー」
「そうだねー」
「わたしも魚料理だよー」
「そうだねー」
「ナオちゃんが魚料理二つ食べて、わたしは次のを注文してもいい？」
「いいよー」
と流しかけ、
「って待ちなさい。そんなに食べられないって」
「むう。作戦失敗」
悪びれる様子のないみなもにため息をつく。
「まったく。ひとのしあわせにつけこんで」
「しあわせにはつけこんでもいい気がする」
「う……」
そうかもしれない。
いやいや、でも魚料理二つ、っていうか、そもそも二人前は無理。このファミレス、ライスの量やたら多いいんだから。
「よかったね」
「まあね。ほお、ゆるんでる？」
「ゆるみっぱなしだよぉ」
あれから、気がつくと織部さんのことを考えている。頭がふわふわして……正直言って、夢心地だ。すぐに織部さんの別れ際のちいさなかわいい笑みが頭に思い浮かんで、ぽーっとしてしまって、なんだかしあわせな気分で脳味噌がゆだっている。

織部さんに告白されたことは、すぐにみなもに話した。僕とみなもは、昔からお互いに起こったことはすべて話しあう。そりゃ、男の子のこととか、女の子のこととか、小学校の体育の時間に教室を分けられて説明されたような、微妙な話題はしないけれども。織部さんのこともそうだ。織部さんのさりげない心配りのことやちょっと気になっていることなどは以前に話したことがある。織部さんの心配りについては、みなもも気がついていたそうだ。女の子からしてもちかちゃんは好かれる子なんだよ、とみなもも太鼓判を押していたので、告白された、と報告したら喜んでくれた。

「でもごめんな。はしゃいじゃって」

少し冷静になって、僕はみなもにあやまる。

「うん？」

みなもはわけがわからないようで小首をかしげる。

「だって、みなもの手が猫になっているほうが大問題なのにさ」

「そんなのいいよぉ。それに、考えたって、どうしたらいいかわからないもん」

みなもは気楽に笑っている。

もちろん、「そんなのいいよぉ」なわけはないんだけど、でもそうなんだよな。

猫になってしまった手を元にもどす方法なんて、さっぱりわからない。

これでも、放課後になるまでは——織部さんに告白されるまでは——さんざん頭を悩ましたのだ。

でもどうしたらいいか、なんて、対処療法さえも思いつかない。やっぱり誰かに相談したほうがいいのだろうか。友達……は、まず役に立たない。役に立たないって言い方は悪いけど、話したところで僕たちと同じくこうやって途方にくれるだけだ。警察や病院？ううん、公の力に頼るのは不安だ。みなもがどこかに連れて行かれてしまうかもしれない。どこかに隔離されて二度と会えなくなるかもしれない。そんなのはだめだ。後見人の佐藤さんと田中さん？

ううん、あのひとたちが真剣に僕たちの気持ちをくんでくれるわけがない。たぶん警察か保健所か病院か、とにかくそういうところに通報して終わりだ。
だめだ。
やっぱりなにも思いつかない。
僕が悩んでいると、ウェイトレスさんが注文をとりに来た。みなもがメニューを読み上げている。
サバの味噌煮セット、ブリの照り焼きセット、カルボナーラ、かぼちゃプリン、モンブラン、ドリンクセット×2　うん、ちゃんとモンブランを頼んでくれている。さすが幼なじみ。僕の好きなものをよくわかってる。頭の片隅で、なんとなくメニューを反芻しながらぼんやりと思う。
って！
「なに魚料理ふたつも頼んでるの！　食べられないって言ったでしょ！」
「大丈夫だよ。ひとつはふたりで食べよ？」
「食べよ？　じゃないよ。そんなに魚嫌いなの？」
「むう。ナオちゃんだって嫌いなくせに」
「まだ間に合う。キャンセルしよ」
僕がウェイトレスさんを呼ぶために手を上げようとすると、
「ああん。ちがうのちがうの」
とあわてて僕の手を左手で掴む。
別に怪我をしているのではないわけだけど、包帯の巻かれた腕をばたばたしている姿がなんとも痛々しい気がしたので（というかはたからはそう見えるだろうから）、とりあえず僕は手を下げる。
「なにがちがうの」
僕は訊く。
「あのね。一品多く頼んでいくと、クリスマスイヴイヴまでに全品食べ終われるんだよ」
「え。ほんとに？　……ううん、でもべつに無理してクリスマスま

でに終わらせることないでしょ」
「でもお、クリスマスイヴはちかちゃんと一緒でしょ？　だったらそれまでにきっちり終わらせないと」
「意味わかんないけど。だいたい織部さんとそんな約束してないよ」
「でもちかちゃんはきっとイヴの夜は会いたいって思っているよ。女の子だもん」
　そういうものだろうか。
　でも。
「いやでも、クリスマスパーティーは毎年みなもとやってるじゃないか。今年だって変わらないよ」
　僕は簡単に割り切るみなもに抵抗を感じて、言い返す。
「うん。だから、わたしとのクリスマスパーティーはお昼にやるの。それで夜はちかちゃんに会いに行くの」
「でも」
「もお。ナオちゃん、これからはちゃんと女の子の気持ち考えるようにしないと、織部さんに嫌われちゃうぞっ」
　自分だって、男の子とつきあったことなんかないくせに、えらそうにお姉さん口調で言うみなもに、なんだかちょっとむっとしたけど、でも、みなもの言うとおりなのかもしれない。みなもだっていちおう女の子なんだし、女の子の気持ちは僕よりもわかるだろう。それに、クリスマスイヴを織部さんと過ごせるなんて、もちろん僕はすごくうれしい。織部さんとデートって考えただけで、緊張でどきどきしてきてしまって逃げ出したい気持ちにもなるけど、すごく、とても、めちゃくちゃ、めちゃめちゃ、うれしい。
　でも。
「うーん」
　やっぱり、さっぱりしないものが残る。
　それは、毎年毎年続けてきたみなもとのパーティが、ないがしろになってしまうこと。中止になるわけじゃないけど、なんだかおまけというか、前座というか、そんな感じになってしまうこと。

それがどうにもひっかかる。
……しょうがないことなのかな？
このままうまくいって僕に織部さんという恋人ができて、そしてみなもにもそのうち恋人ができたとしたら、僕とみなも、ふたりで過ごす時間はどんどん減っていってしまうのだろう。いまは同じ学校に通っているけど、大学はどうだろう。進路がちがえば、会えるのは朝と夜だけになってしまうだろう。もし同じ大学に進んでも、そのあとには就職だって控える。どこまで一緒にいられるかなんて、わからない。それはきっと、大人になるということだから、生きていくということだから、しかたのないことなんだろうけど……。
「ナオちゃん、難しい顔をしているよ？」
「え？　そう？」
沈んでいた考えから意識をもどすと、目の前には、すでにあいかわらずなんにも考えていなさそうなのんびりにこにこ笑顔にもどったみなもがいる。
「そのうちシワが深くなって、はんにゃー、ってなっちゃうかも」
般若の、にゃー、のところで、みなもは猫の手を、くいっくいっ。
はあ……。
一気に脱力した。真剣に考えて損した気分になる。
やがて料理が運ばれてきた。
サバの味噌煮セット。
ブリの照り焼きセット。
カルボナーラ。
「あのさ」
「うん？」
「一品はふたりで食べるとか言ってたけど、みなもはそんなに食べられるの？」
みなもの前にはカルボナーラがある。食事としてはパスタはライトだけど、ここの料理はどれもけっこう量が多い。カルボナーラも、一・五人前とまでは言わずとも、かなりこんもりと盛りつけされて

いる。
「え？　うーんと……てへ？」
疑問系で言うんじゃない。
けっきょく僕が無理してサバとブリのほとんどを片付けなければならないみたいだ。
「まったく……」
「てへへ」
もしかしたら、みなもはパスタさえも食べきれず、僕に押しつけるかもしれない。デザートはちゃんと食べるくせに。そういえば昔からいまにいたるまで、みなもと食事をするといつもこんな感じだよなぁ。

（4）へ続く

4／20

（4）

みなもとはじめてファミリーレストランに行ったときのことを、僕はまだはっきりと憶えている。

小学校に上がる前。僕の両親もみなもの両親もまだ健在だったころだ。

その日はクリスマスイヴで、僕たちのような家族連れで店内はあふれかえっていて、席に案内されるまでにけっこう待たされたのを憶えている。順番を待つあいだ、みなもとふたりでドアの窓にはりつき、ひらひらと舞い降りてくる雪が店内から漏れる光にきらきらと輝くのを飽きもせずに眺め続けていた記憶も、ぼんやりと脳裏に残っている。

やがて席に案内された僕たち二家族で、最初にメニューを決めたのは僕とみなもだ。窓の外を眺めるのと同じくらい飽きることなくショウウィンドウのメニューを眺めていた僕たちは、席につくなり、お子様ランチ！　と声を合わせた。

ちいさなハンバーグとスパゲティとオムライス、それからちょこんとクリームののったプリンのセットというごくありきたりのお子様セット。オムライスにはお約束の旗ものっている。なによりも惹かれたのはオマケでおもちゃがついてくること。高校生になった僕なんかから見たら、本当にたわいのないお菓子のオマケ程度のものなんだけど、そのころの僕やみなもにとっては、大好きなハンバーグやスパゲティやプリンが一度に食べられて、そのうえおもちゃまでもらえるなんて、夢のようだった。

おもちゃは子供のてのひらにおさまるくらいのちいさな箱に入っていて、それがさらにファンシーなまるっこい星柄のプリントされ

た紙袋に入れられていた。ショウウィンドウにも箱の中身は飾られていなかったので、なにが入っているかはわからない。
優先的に作ることになっているのだろうか、おこさまランチはすぐに運ばれてきた。もちろん、僕とみなもは早くそのおもちゃの中身を見たかったのだけど、ご飯を食べ終わってからねと親におあずけをくらっていた。だから、僕とみなもは、大好きなハンバーグやスパゲティを夢中で食べた。
さきに食べ終わったのはいつものように僕だった。好き嫌いはないけれども元来のんびり屋であまり量も多く食べられないみなもは、どちらかの家に集まっての二家族での夕食のときでも、いつも最後まで食べている。そのときもそうだった。一所懸命、フォークやスプーンをくちに運んでいるのだけど、気ばかり焦ってしょっちゅうこぼすものだからなかなかお子様ランチプレートのうえの料理が減らない。
ご飯を食べ終わったのだから、僕はもう、おもちゃの中身を見てもいいはずだった。でも、みなもの懸命な姿と、なにより親たちからの無言のプレッシャーを子供心に感じ、じっと我慢していた。
そのうちみなもがぽろぽろと泣き出した。
ぐすぐすと鼻をすすりながらくちにする言葉はよく聴こえなかったけど、どうやら、ごめんね、ごめんね、とあやまっているようだった。
そのときやっと僕は気がついた。
のんびり屋のみなもが、今日に限って焦っていたのは、僕を待たせないためだったのだと。そういえばそうだ。いつだってのん気でスローペースのみなもなんだから、ほんの少しの時間、おもちゃの箱が開けられないからって焦るはずもない。みなもが気にしていたのは、箱の中身じゃなくて僕のことだったのだ。
涙がぽたぽたテーブルに落ちるのを見て、僕は反省した。急かす言葉をくちにしたわけではなかったけど、そのときの僕はあきらかに箱を開けたくてうずうずしていた。つまり、みなも早く食べ終わ

れよぉ、とたぶん顔に出してしまっていた。みなもは、お子様ランチが届いたそのときから焦って食べていた。はじめから、僕を待たせてしまわないために急いでいたのだ。それがわかったから、僕は反省した。そして言った。

ゆっくりたべていいよ、みなも。それにおなかいっぱいになったらいえよ。ぼくがたべてあげるから。このあいだみたいにおなかこわしたらたいへんだからな。

みなもは、みなもの小食を気にかける親を心配させないように、無理をして食べてお腹を壊したことがあったのだ。もちろん、そのころのみなもの両親がそんな心配をしていたことや、みなもが心配かけないように無理をしたことをちゃんと理解したのは、それからずいぶんとあとになってからのことだったけど。

僕がはげますように言うと、みなもは、うん、と顔をほころばせた。

いま泣いたカラスがもう笑った、と親たちが愉快そうに笑ったのを憶えている。

その雰囲気に安心したのか、やはりもうお腹いっぱいいっぱいだったみなもはすぐに、もう食べられないの、と僕に助けを求め、親たちも僕たちのやり取りをほほえましげに見ているだけだったので、僕がみなもの残した料理を食べた。

そうして、ようやくご飯を食べ終わった僕とみなもはにっこり笑いあい、さっそくオマケのおもちゃの開封にとりかかった。

ごそごそと紙袋から箱を取り出して――そこで気がつけばよかったのに――開封して、僕は落胆した。

箱のなかには綿がつめられていて、そのなかにビニールに入ったおもちゃの指輪が入っていたのだ。しかもピンク色の、大きなハート型のガラス玉のくっついた、どう見ても女の子用の。つまり、おもちゃは男の子用と女の子用があったのだけど、あやまって僕のまで女の子用が来てしまっていたのだ。そういえば箱にはかわいらしいくまやうさぎの顔の描かれたいかにも女の子用ですって柄だった

のに。男の子用の飛行機や電車の柄じゃなかったのに。
期待していたぶん僕はがっかりして、目元に涙が浮かんでしまった。
たぶん、親が店員に事情を話してくれれば、男の子用をあらためて用意してくれたことだろう。
しかし僕の目から涙がこぼれ落ちる前に、す、と目の前にちいさなてのひらが差し出された。そこには、やはりハート型だけど、青いガラスの嵌ったおもちゃの指輪がのっていた。顔をあげると、そこにはみなもの真剣な顔があった。
みなもは言った。
ナオちゃん、あおはおとこのこのいろだよ。だからこうかんしよ？
交換して青いものになったところで、ハート型の指輪はハート型の指輪だ。男の子の僕にとっては、正直何も変わらない。でも、青がみなもの大好きな色だということを、僕は知っていた。
ね、ナオちゃん。こうかんしよ？
いつになく真剣な表情のみなもに、僕は気圧された。涙も引っ込んだ。
みなもはきっと、僕のピンチを救おうとしているのだ、そう思った。実際は、店員に事情を話せばいいだけなのだからお門違いもいいところなのだけど、でもみなもはそのとき真剣だった。
だから僕は指輪を交換した。
ピンクの指輪をみなもの手にはめてあげた。
青い指輪をみなもは僕の手にはめてくれた。
成り行きを見守っていた両親たちは、さっき僕がみなもをはげましたとき以上に、愉快そうにはしゃいだ。　みなもの両親が言った。
ナオちゃん、みなものこと、よろしくね。
よろしくな、ナオくん。
う、うん。
よくわからなかったけど、僕はうなづいた。
よろしくね。

ただ親の真似をしただけだったのだろう、僕と同じく、やっぱりわけがわからなかっただろうみなもまで同じことを言ったので、やっぱり僕は、

うん。

とうなづいた。

それから今度は僕の両親とみなものあいだで同じようなやりとりがあって、僕とみなもはきょとんとしていたのだけど、もちろん、いまではそのときどうして両親が楽しそうにしていたのかの理由もわかる。

つまりはからずも、僕とみなもは指輪交換をしていたってことだ。

そりゃ、まるで家族のように仲が良かった両親たちにしてみれば、お互いの子供たちのそんな様子は、良い見ものだっただろう。

あのときの青い指輪は、一時期この町から引っ越していたときのどさくさでいまはどこにしまってあるのかわからなくなっているのだけど、いつもはおっとりのみなもの一所懸命さや、両親たちの楽しげな笑顔が印象的だったその日のことは、いまだに驚くほど鮮明に憶えている。

ちなみにそれ以降、みなもが残す料理は僕が片付けるのが約束事になり、みなもの好きな色は青からピンクになった。

――と、思い出に浸っているうちにも食は進み、僕はブリの照り焼きセットを食べ終わる。あいかわらず食事の遅いみなもはまだカルボナーラをくるくるとフォークに巻きつけている。

僕はサバの味噌煮をきっちり半分に切り分け、片方をみなもの側に寄せる。

「これ、なあに？」

みなもがきょとんと訊いてくる。

いやいや、きょとんとするんじゃないってば。

「半分ずつ食べるって言ったじゃない」

僕が言うと、みなもはおそるおそるといった様子で答える。

「えと。わたし、もうお腹いっぱい……」

どうせそんなことだろうとは思ったんだけどね。
「猫なんだから魚好きでしょ」
僕は包帯を巻いたみなもの左手を見ながら言う。
「魚が嫌いな猫もいると思う」
「いや、いないと思うけど」
わからないけど、実際、そういう話は聞いたことがない。
「いじわるぅ」
上目遣いですねた顔をするみなも。
はあ。
「だから無理に注文しないほうがいいって言ったのに」
「むう」
……ま、いいけどね。

（5）へ続く

（5）

翌朝、猫の手は二本になっていた。
「にゃん、にゃん」
みなもは、くすくす笑いながら家の門から後ろ手に出てきたと思ったら、さらに右腕まで猫になってしまった両腕で、招き猫のポーズをとってみせた。
僕はあわてるよりも前に脱力してしまった。
「にゃん、にゃん。じゃないでしょ」
「金招き」
右手だけをにゃん、と招き猫。
左腕も右腕もまだ包帯を巻かずにむき出しの猫手だ。たぶん両方とも猫の手じゃ巻けなかったのだろう。制服も、やっとのことで着た様子で、まるで追いはぎから逃げてきたような乱れ具合。胸のボタンは外れているし、シャツははみ出ているし、スカートはずれている。髪の毛もあちこち跳ねている。
「……やり直し」
「あう。でもね、ナオちゃん……」
「女の子失格」
「あう～」
上から下まで全身をチェックした僕が言うと、情けない顔になるみなも。
「僕がやってあげるから」
「うん！　ありがとう♪」
嬉しそうにうなづくみなもを、いま出てきたばかりのみなもんちの玄関に押し込む。

勝手知ったるみなもの家。
歯ブラシからコップ、ブラシに到るまで、すべてピンクに統一された洗面所にみなもを連れて行き、洗面台備え付けのイスに座らせる。
「まず髪ね。高校生にもなって、これじゃ恥ずかしいでしょ」
「はーい」
みなもは鏡に映った自分を覗き込み、脚をぱたぱたとさせている。まるで子供だ。
「ねーね、ナオちゃん。まだー？　まだー？」
櫛を手にした僕を鏡ごしに見上げ、本当に子供のようにおねだりをしてくるみなも。僕はあなたのおかあさんですか。
「はいはい」
ため息をひとつついて、みなもの髪をくしけずる。
みなもの髪はくせっけだ。天然のソバージュのように巻いていて、やわらかくて綺麗なんだけど、まとめにくい。それを、お湯に軽く浸して絞ったタオルで押さえながら整えていく。ふわりとシャンプーの香りが鼻をくすぐる。みなもの匂いだ。
「ふにゃあ」
みなもはしごく気持ちが良さそうだ。猫だけにいまにも喉を鳴らしそうというか。
「寝ないでよ」
「はわ。なんでわかったの？」
わかるってば。目がとろんとしているもの。
登校前のこの時間、もちろんゆっくりしているわけにはいかない。髪をなんとかみっともなくない程度にまとめると、今度はみなもを立たせて、制服の乱れを整える。
まずは胸元のボタン。ジャケットの下のシャツのボタンが互い違いなものだから、ピンク色の下着が思いっきり見えている。
はあ。僕、年頃の男のはずなのになにやってんだろ。
自分の境遇に少し疑問を感じながら、僕はみなものシャツに手を

伸ばす。そうすると、当然といえば当然なんだけど、みなものほどよく膨らんだ胸元が目にはいる。でも幼なじみとはいえさすがにそんなところを見ているのは気まずいので、すぐに目をそらしてボタンに集中する――寸前、それが目にはいった。
「あれ？　それ」
「うん？　あ、これ？」
自分の胸元を覗き込んでみなもが答える。
「懐かしいでしょー。ずっと宝箱に入れておいたんだけど、首飾りにしてみたの。ナオちゃん……これ、憶えてる？」
みなもの胸元には、見憶えのあるピンクのハート型の指輪に細いチェーンを通し、ネックレスにしたものがかかっていたのだった。
ちなみに、宝箱、というのは、みなもの大切なもの、主に僕が昔みなもの誕生日にあげたおもちゃのアクセサリーや手紙を入れたお菓子の空箱のことだ。
「憶えてるよ」
昨日も思い出していたし。
僕の答えに、みなもは嬉しそうにほにゃっと相好をくずす。
「でもどうして急に？」
みなもも昨日、僕と同じように思い出していたのだろうか。
「うーん。にゃいしょ」
にゃいしょ……内緒？
「ん」
僕が少しにらんでみせると、みなもは、てへ、と舌を出し、
「ほんとーは、にゃんとにゃく」
「なんとなく？」
「うん。にゃんとにゃく」
猫語で話すのが楽しいらしく、くすくす笑う。
ほっといて、今度はシャツの裾をスカートの中に入れ、さらにスカートのボタンを留める――って僕、ほんとになにしてるんだろ。
高校生の男の子なんですが。まあ、みなもだからしょうがないけど。

で、最後に包帯だ。
左腕に巻き、右腕に巻き……しかし、これ、どういう言い訳にしよう。昨日の今日でさらにもう片方の腕まで怪我なんて、あきらかに不審だ。
「あやまって筋を違えた左手で手すりを掴もうとして失敗して、また階段から落ちて、今度は右手まで筋を違えたことにしようか？」
「むう。わたし、そんなにどじじゃないもん」
「そうかなぁ。みなもならありえるって、クラスのみんなは納得すると思うけど」
「もお！　ナオちゃん！」
ふくれるみなもをスルーして、僕は言う。
「学校、休む？　みなもがあっけらかんとしているから僕までなんだか深刻になれないでいるけど、これってあきらかに異常事態なんだよ？　だから本当は家の中でおとなしくしているのが一番いいかもしれない」
みなもはすぐに言い返す。
「え～！　やだよぉ。ナオちゃんと学校、最後まで行きたいもん！」
「最後までって、あと数日でしょ。お正月が明けたらまたすぐに三学期が始まるんだし」
大げさな。
「むう。行くのぉ！」
「はいはい」
ま、ちょっと無理はあるけど、猫の手さえ見られなければなんとかなるかな。ノートは僕のをあとから写せばいいし。
しかし――。
「それにしても、なにが原因なんだろうね、これ」
みなもの包帯の手を手にとりながら言う。
「本当に、思い当たること、ない？　よく思い出して」
「うーん……」
みなもは包帯のなかで、にゃん、にゃん、といった感じに猫の手

首を動かしながら、考え考え言う。
「うーんとね……一昨日、ファミリーレストランの帰りに白い猫さんに会ったでしょ？　すっごく綺麗でかわいい猫さん。それで、わたしは、猫さんになりたいなって、なれたらいいなぁ、って思ったの。それだけだよ？」
「それだ！」
「あう？」
「白い猫だよ！　きっとあの猫がなにか関係あるんだよ！」
妖怪？　猫の幽霊？　そんなことはわかんないけど、きっとなにか関係ある。あの猫、やたらと綺麗だったもの！　神秘的だったもの！　きっとなにかあるんだ！　やっと手がかりが掴めた！
「みなも！　今日学校が終わったらあのときの猫、探すよ！」
「う、うん」
僕の勢いに圧され気味のみなもにかまわず、僕は決めてしまう。
「それからみなも！」
「わ。まだなにかあるの？」
「学校が始まるまで時間がない。全力で走るよ！」
「あう～」
包帯のなかの、みなものふさふさと柔らかい手を握って、僕たちはみなもの家を飛び出した。

（6）へ続く

6／20

（6）

放課後、僕とみなもはさっそく猫探しを行ったけど、一昨日の夜の白猫は見つけることができなかった。このあたり、野良猫、外猫はけっこう多いのだけど、真っ白い猫は珍しい。きっとよく目立つ。だから一昨日見かけたあたりを重点的に探せば案外容易に見つかるのではないかと考えていたのだけど、あまかった。

日が沈むまで僕とみなもは路地を探しまわり、そのあと夕食をとるためにいつものファミリーレストランに入った。食事を終えたら、また探してみるつもりだ。夜にならないと出歩かない猫なのかもしれないから。

「あーん」

みなもがくちをあける。

「それ、こっちが言うセリフだから」

僕はくるっとフォークで巻いたたらこスパゲティをみなものくちに運ぶ。

みなもは両手が使えない。猫の手でなんとかフォーク程度なら掴めるにしても、ファミレスのなかで包帯を解くわけにはいかない。だから今日は僕とみなもは対面ではなく隣に座り、僕がみなもに料理を食べさせている。つまりかなり人目が気になる、恥ずかしい事態に陥っている。

相手がみなもで、緊張することがないのだけが幸いかも。

これが織部さんだったら、緊張でぶるぶる手が震えてしまうかもしれない。

今日のメニューは、魚料理地獄からやっと抜け出して、パスタ三種。たらこスパゲティ、ミートスパゲティ、ペペロンチーノ。

昨日の失敗を踏まえて、今日はそれぞれ一品ずつにしようと提案したのだけど、いつもは無理なことを素で言い出すことはあっても、わがままは言わないみなもが、珍しくこのファミレス全メニュー食べつくしだけはクリスマスイヴ前までに終わらせることにこだわるので、しょうがなく折れた。今日はわたしも一・五人前食べるよ、なんてみなもは言っていたけど、けっきょく今日も僕が二人前食べることになるんだろうな、とあきらめはついている。　あらかた食事が済んだところで、僕たちは話す。

「でもさ、このままどんどん猫になっていったらどうしよう」

「うーん。猫さん、かわいいよ？」

「かわいければそれでいいって？」

「うん♪　わたしが猫さんになったら、ナオちゃん、飼ってくれるよね？」

「やだよ、人間みたいに大きな猫なんて。猫っていうより虎だよ」

「むう。ナオちゃんが冷たい」

すねてみせるみなも。

「それより、前向きに考えなきゃ。白猫を探せば、きっとなんとかなるよ」

僕は軽く流して話し続けるけど、

「……ナオちゃんが冷たい」

みなもは何故か本格的にすねているようだった。

「……わかったよ。飼うよ。本当に猫になったらね」

「ほんとっ！」

「そのかわり、猫になるときはちゃんと普通の猫サイズになってよね」

「うん！　やったぁ！」

とたん、上機嫌になってはしゃぐみなも。自分が人間じゃなくて、猫になってしまうってことのなにがそんなにうれしいんだか。

「ずっと飼ってくれる？　一生飼ってくれる？」

「はいはい。一生飼います」

「約束だよ？　引っ越しのときに捨てていくとか、無しだよ？」
「捨てないよ。そんなことするわけないだろ」
「うん！　あーん」
元気よくうなづいたかと思うと、口をあけて、デザートのチョコレートパフェを食べさせてくれるようにせがむみなも。
まったく。調子いいんだから。
しかしこれじゃ、猫の世話じゃなくて、鳥に餌をあげているみたいだなぁ。

一昨日と同じくらいの時間にファミレスを出て、同じ道筋を通り、白猫と出あった路地周辺をしばらく探してみたけど、けっきょくその日、あの白猫を見つけ出すことはできなかった。

（7）へ続く

7／20

（7）

翌朝、今度は耳が生えていた。
いわゆるネコミミ。
本物の猫耳。
みなものやわらかなくせっけの内側から、ひょこん、ひょこんとのぞいている。
「にゃーん♪」
今日も包帯が巻けなかったのだろう、昨日と同じくやはりむき出しのままの猫の両手で招き猫ポーズのみなも。
「にゃーん、じゃないって」
あいかわらず緊張感のないみなもを、すぐに家に連れ帰る。
これではさすがに学校に連れて行くわけにはいかない。
授業中帽子をかぶっているわけにはいかないし、左手、右手、さらに今日は頭にまで包帯を巻いているとなったら、さすがに担任教師もなにかあるのではないかと怪しむだろう。
「やっぱり、朝起きたら生えてたの？」
「うん。あのね、人間の耳より、よく音が聴こえるんだよ」
猫耳に触ろうと手をのばすと、くりんと動いて後ろを向く。
「あ。反射的に動いちゃった。どうぞ、ナオちゃん」
今度は触らせてくれる。
ふよっ。
くてくて。
内側に触ろうとすると、くすぐったいのか、また耳がくりんと後ろを向く。
わかっていたことだけど、やっぱり本物だ。

「かわいいでしょお？」
かわいい。ふわふわのみなもの髪に猫耳は似合いすぎる。
ってそうじゃない。
「かわいいでしょお、じゃないよ！　これはもう真剣にならなきゃだめだよ！」
これはもう、どころか、最初に左腕が猫の腕になったときから真剣にならなきゃいけなかったんだけど。みなもののんびりとした空気に感染して、そのつもりはなくともどこか気楽にかまえちゃってたけど、三日続けて猫化が進んでいるのだ。これはもう、いくらみなも本人が焦っていないとはいえ、さすがに真剣にならざるをえなかった。
「ナオちゃん、朝から怒るのは身体に悪いよ」
「怒ってるんじゃないよ。真面目に話しているの。だって、このまま毎日毎日身体のどこかが変化していったら、クリスマスあたりには本当に猫になっちゃうよ？　いいの？」
「んー、でも、ナオちゃん、そうなったら飼ってくれるんでしょ？」
昨日の会話のことだ。僕は、さすがにちょっと、かっとなった。
「もう！　みなもふざけすぎだよ！　少しは真面目に考えてよ！」
「むう。真面目だよぉ。わたし」
みなもは頬をふくらませるが、それ自体が真剣じゃないように見えて、僕は乱暴に言う。
「僕、学校行く。みなもは今日は一歩も家から出ちゃダメだからね！」
「えっ。わ、わたしもナオちゃんと一緒に学校に行きたい――」
僕はみなもの言葉を最後まで聞かずに玄関のドアを閉めた。
みなもが最後に言った「一緒に学校に行きたい」って言葉に、なんだか妙にせっぱつまったものを感じた気がしたけど、どのみち連れて行くわけにはいかない。僕は一度かぶりをふってその声を脳裏から消し去り、学校へ向かった。

僕はその日、休み時間、昼休みと図書館にこもった。少しでもみなもの猫化現象を止めるための手がかりを探すためだった。みなもの状態を考えたら、本当はもう、僕だってのん気に学校なんかに来ているどころではないのだと思う。でも、僕の通う高校は歴史も古く、校舎とはべつに図書館があり、近くの大学から資料を探して教授が訪れるほど古くからの本がたくさん収蔵されているので、調べ物には最適だったのだ。

放課後も僕は図書館にこもって、手がかりになる本がないかと探した。民間伝承や、都市伝説、それからこの地方の郷土資料。かたっぱしから本を開いては閉じして探した。

でも猫に関する逸話はあれど、みなもの症状に該当するような伝承は見つからなかった。

人間が猫になっていく。

妖怪じみているのだか、ばかばかしいのだかわからない現象なんて、真面目な本には書かれていないのかもしれない。かといって、SFやファンタジーの小説本に似たようなネタを探したところで、解決の糸口になるとは思えない。……とは思いつつ背に腹は代えられないと小説の棚を探し始めたところで、下校時刻を報せる校内放送が流れた。

はぁ。

僕はためいきをついて、立ち上がる。中腰状態になって本を物色していたので、腰が痛い。

んーと伸びをし、またひとつ、手がかりを探せなかった落胆のため息を落とすと、僕は図書館を出た。

図書館から渡り廊下を通って校舎に入る。校舎内には人気がない。もうすっかり日が沈んでいる。みなもは家で大人しくしているだろうか、きつく言い過ぎちゃったな、と少し後悔しながら、蛍光灯に照らされた無機質な廊下を昇降口へと歩いていく。

と、僕のクラスの下駄箱の前まで歩いてきたところで、思わぬひ

とと会った。
織部ちかさんだ。
「あ、あのっ、こ、こんばんはっ」
「こ、こここんばんはっ」
織部さんと僕はお互い一瞬のうちに真っ赤になり、どもりながら挨拶を交わす。
そして交わしたきり、ふたりとも次の言葉が出てこない。
心臓がいきなりどきどきしだす。
いまのいままでみなものことで意気消沈していたのに、なんてげんきんなんだと思いつつも、頭のなかがこのあいだの告白のことでいっぱいになる。
この織部さんが、こんなかわいい織部さんが、僕のことを好きなんだ……。
どうしよう。
なにか話さなくちゃ。
せっかく好きって言ってくれたのに、なにも話さなかったら、嫌っていると思われてしまうかもしれない。ううん、緊張してしゃべれない男なんて、って嫌われてしまうかもしれない。
焦って焦って、焦りまくる。
「ど、どうしたの？　こんな遅くまで」
僕はやっとのことで訊く。
「え？　あ、あの、その、ちょっと、その……」
織部さんも焦っているのだろう、言葉が要領を得ない。織部さんは落ち着かな気に目を泳がせ、ちらっととなりの下駄箱の陰に目をやる。
その視線の動きに合わせて、さっと影が動いた気がする。
それでなんとなくわかった。
きっと友達になにか言われたのだろう。
はやく返事をききなよ、とか。
積極的にアプローチしなよ、とか。

それできっと、僕が帰るのを待っていたのだ。
これはきっと織部さんの積極的な意思じゃない。
織部さんはあのとき、返事はいまじゃなくていい、って言ったのだから、彼女なら僕から声をかけられるのを待っているはずだ。たしかに僕は昨日今日と織部さんを待たせてしまっているから、返事を催促されてもしかたないとも思うけど、でも織部さんは大事な決断を早くしろと急かすような、そういうタイプではないと思う。それに告白してくれたときだって、最後は逃げ出してしまったくらいに内気な子なのだ。いまじゃなくてもいいと言ったのに、自分から積極的に待ち伏せをするとは思えない。
きっとすごく緊張して待っていたんだろうな。
僕が図書館で調べ物をしている間、ここでずっと。
織部さんの友達だって（川添さんと、光井さんかな）、悪気があってこんなことをしているのではないだろうけど、かわいそうじゃないか、ってちょっと思う。
って、すでに彼氏気取りな気持ちになるのはずうずうしいけど。
「あ、あの」
「あのさ」
織部さんと僕の言葉が重なる。
ふたりとも上ずった声。
たぶん、ふたりは同じことを言おうとしている。
だから、思わず口をつぐんだ織部さんの代わりに、僕が言った。
「その。よ、よかったら、一緒に帰らない？」
「は、はい！」
織部さんの顔に、ほっとした様子の笑みが広がる。
断られたらどうしようか、ここで待ちながらずっと緊張していたんだろうな。僕は申し訳ない反面、すごく嬉しくなる。
僕、やっぱり織部さんのことが好きだ。

（8）へ続く

8／20

（8）

校門を出たところで、僕たちについてきた影は反対方向に歩いていった。織部さんがちらっとふりむいたので、僕もふりむくと、やっぱり川添さんと光井さんで、織部さんに向かって、がんばれ、と親指を立てていた。僕も見ているのに気がつくと、あわてて背中を向けてそそくさと歩いていったけど。

僕と織部さんは、なにを話していいかわからず、下駄箱を出てからずっと無言だった。

緊張で、身体がギクシャクしている。右手と右足が同時に出ているのに気がついて、さりげなく直したりする。　織部さんは織部さんで、赤い顔のまま、ずっと下を向いて歩いている。

僕には実のところ話すことが、というか、話さなければいけないことがある。

もちろん、告白の返事だ。

返事は決まっている。

だからあとは口に出すだけなんだけど、なんだかどうにもタイミングがつかめない。

そんなに軽々しく答えてしまっていいものなのかどうかとか、もっとよく考えなくてはいけないんじゃないかとか、あとみなもとの関係はどうなるのかなってこともちらっとだけどどうしても頭の隅にある。

あ、でもそういえば、この場にふさわしい話題がひとつある。

「あ、あの。織部さんの家は、どこらへんなの？」

一緒に帰るといったって、みなもが相手のときとは違って、限度がある。登下校の際に校門からこちら側の道を織部さんが歩いてい

るのを見たことがあるから、いまのところは一緒なのだと思うけど。
「あ。えと。わたしの家は……想いの丘ニュータウンってわかりますか？」
「うん。あのちいさな丘――想いの丘の、ここからだと反対側になるあたりだよね？」
「はい。その想いの丘ニュータウンの南地区に総合病院があるんですけど、その近くです」
僕とみなもの家とは想いの丘を挟んでちょうど反対側ってところかな。想いの丘をつっきればそんなに遠くないけど、丘を登ることを考えれば回り道をしたほうが楽、って感じだろうか。
「そっか。僕の家はちょうど丘を挟んで反対側あたりかな」
「はい、知ってま――あっ」
ぽろっともらしてしまい、あわててくちを押さえる織部さん。
「あ、あの、わたしは、べつに――」
僕の家を知っていることに後ろめたさを感じているのだろう。織部さんはさらに真っ赤な顔をして、わたわたと言い訳をくちにしようとする。
でも僕にはすぐに想像がついた。
「川添さんたちが調べたとか？」
「あ、はい。い、いえ、その……」
また思わず答えてしまい、すぐに否定しようとするけど、もう遅い。遅いことを悟り、織部さんはもうなにも言えなくなってしまう。
困って、後悔して、いまにも逃げ出したそうなのにがんばって踏みとどまっている姿の織部さんは、やっぱり小動物チックだ。好きな子にいじわるをしたくなる心理ってこういうのなのかな。困っている姿もまたかわいいって思ってしまった。でもすぐにかわいそうになって、僕は言う。
「いい友達だね」
織部さんははっと顔をあげて、僕を見る。
校門を出てからまっすぐに僕の顔を見てくれたのはこれがはじめ

てだ。
織部さんは、嬉しそうに笑って、
「はい！」
と答える。
それからやっと少し緊張が解けたのか、たどたどしくだけど、話してくれる。
僕の家は住所を知っているだけで行ったことはないこと。住所は職員室の担任の先生の名簿からこっそりと川添さんと光井さんが調べてくれたこと。彼女たちは織部さんのために本当に真剣で、今日のことも、臆病で逃げ出したがる自分を引き止めて鼓舞してくれたこと。そしてそのことに織部さんは心の底から感謝していること。
たどたどしくも一所懸命友達のことを話す織部さんからは、その友達想いのやさしい心があたたかく伝わってきた。僕までなんだかやさしい気分になってくる。
「あ、あの。すいません。わたし、自分ばかり話してしまって」
はっと気がついて、織部さんは頬を染めて頭を下げる。
「え。いいよ、いいよ。ずっと聞いていたいくらいだよ」
僕が本心からそう思って言うと、
「そ、そんな。わたし、話し下手だし。すぐ緊張してしまうし」
「そんなことないよ。川添さんたちのこと大事にしているんだなって、織部さんのやさしい気持ち、伝わってきたもの」
「や、やさしいだなんて、そんな。わたしは普通で……なにやってもだめな子で……か、からかわないでください……」
恥ずかしいらしく、きゅうっと小さくなってしまう織部さん。
僕はすぐに言う。
「からかってなんていないよ。僕、織部さんがやさしいって知ってるもの」
「え？」
急に顔が熱くなる。心臓がどくどくと脈を打つ。
よし。言うぞ。

言わなきゃ。ここで言わなきゃ！
深く息を吸って、僕は言う。
「ずっと、見てたから……」
「そ、それって、その」
もう一度息を吸って、続きを言おうとしたそのときだった。
すでにとっぷりと暮れていた闇夜に、さっと白い影が走った。
「あっ」
二人の目がそちらに向く。
白い影は光のように夜道を走り、塀の上にさっと乗る。
いた！
あの白猫だ！
僕の身体は反射的に動いていた。
「夏目くん？」
急に身を翻した僕に驚いて、織部さんが僕の名を呼ぶ。
「あの猫、探していたんだ」
ぱっと走り寄ろうとした僕だけど、あわてて近づいて白猫を驚かせてはいけない。
織部さんにそう言うと、僕は白猫が警戒しないように、ゆっくりと、肩の力を抜き、自然な動きを心がけて、近づいた。
白猫はそんな僕を一瞬見たけれど、害がないと判断したのか、そのままぺろぺろと身体を舐め始める。
「ひさしぶりだなー。僕のこと、憶えてるかー？」
そんなことを言いながら僕は白猫の側まで近づいた。
この白猫は、まちがいなくあの晩の白猫だ。全身純白で、暗い路地のなかで街路灯の光を受けると、輝いているように見えて、神秘的にさえ見える。
この猫がみなもの猫化に関係しているのだろうか。
僕はじっと猫を見つめる。
白猫も、側に来たままじっとしている僕をもう一度見上げ、僕の目を見つめる。

が、すぐにまた身体を舐める。
白猫は僕をまったく警戒していないようだった。
手をのばして背中を撫でてみた。しかしこの前の夜と同じく、やっぱり噛みついたり引っかいたりしないし、逃げ出したりもしない。飼い猫ではないと思うのだけど、ずいぶんと人間慣れしている。
……たしかにものすごく綺麗な猫だけど、普通の猫のように思える。
「あの、夏目くん」
織部さんに呼ばれ、ふりむく。
織部さんは、カバンから彼女らしいちいさな弁当箱を取り出していた。フタを開けた弁当箱には、ウィンナーが二本、残っていた。
「食べるかな？」
織部さんは遠慮がちに訊いてくる。
僕が猫を手なずけようとしているのを見て、気をきかせてくれたのだろう。
「うん。ありがとう」
と僕がお礼を言っているあいだにも、猫は目ざとくウィンナーに気がつき、すたっと路地に飛び降りると、とことこと織部さんに向かって歩いていく。
「はい。どうぞ」
スカートをたくし込んで織部さんはしゃがみ、ちょこんと行儀よく座り込んだ白猫の前に弁当箱を置く。白猫は、にゃあ、と織部さんの顔を見上げて一声鳴くと、弁当箱のウィンナーを食べ始めた。白猫は前足でウィンナーを押さえて、器用に食べている。
僕もしゃがみ込み、織部さんとともに、白猫の食事を見守る。
「かわいいですね」
「うん」
人慣れしていてうーうーと唸ることもなく、夢中になってウィンナーにかじりつく姿は、とてもかわいかった。
でも。

「でも、普通の猫みたいだ」
とても綺麗な猫というだけで、どう見ても普通の猫だ。
「普通の、って？」
「あ、いや、えと……」
みなもの猫化のことを話して、信じてもらえるだろうか。
うん。織部さんなら信じてくれる気がする。力になろうともしてくれるだろう。
でも、安易に僕たちの問題に巻き込んでしまってはいけない気もする。
僕が逡巡しているあいだに白猫はウィンナーを食べ終え、食事を与えてくれた織部さんの脚に身体をすりつけ、ごろごろと喉を鳴らし出す。
織部さんは、くすくすと笑いながら、白猫の喉をころころと撫でている。背中を撫で、尻尾の付け根あたりをかりかりとかいてあげると、猫は尻尾を立ててふるふるとふるわせる。気持ちいいのだ。
やっぱりどう見ても普通の猫だ。
ふう、と密かにため息をつき、織部さんに話しかける。
「織部さん、猫に慣れているんだね」
猫と戯れる織部さんには、恐る恐る、といった様子がない。この子はどこまで許してくれるのかな、という気づかいが見えるだけだ。
「うん。このあたりってにゃーにゃ、多いから、よくお弁当のおかずをあげたりしているんです」
「……にゃーにゃ？」
「あ。ち、ちがくて、その、猫……」
織部さんの顔がぼっと赤くなる。
なるほど。
「にゃーにゃ、って呼んでるんだ？　かわいいね」
「えっ？」
織部さんの頬がさらに赤くなったので、そこでやっと僕は、かわいい、が二重の意味を持ってしまっていることに気がついた。

今度は僕があわてる番だった。
「あ、ちがくて、その？にゃーにゃ？って呼び方が、かわいいって……」
とそこまで言って、その言い方だともうひとつの意味を否定してしまうことに気がついて、
「あ、いや、？にゃーにゃ？って呼ぶ織部さんも、その、もちろんかわいくて」
ってなにを言ってるんだ僕はーっ！
「え、あ、その、わたし……」
一瞬かんちがいした自分と、でもやっぱりかわいいと僕に言われたことに、織部さんは言葉が出てこないようだった。
僕は僕で恥ずかしいことを言ってしまい、頭に血が上って言葉が出ない。
そのあとはふたりして、もじもじとだんまり。
やがて、
「あ」
二人の声が重なる。
お礼の挨拶なのか、白猫は、にゃっ、と一声鳴き、塀の上に飛び乗ってとことこと歩いていってしまった。
「行っちゃいました」
「行っちゃったね」
暗闇に消えていく白猫を、しばらくふたりして目で追い、それから僕は、あたふたどきどきと微妙な空間を作ってしまっていた僕と織部さんと、そんなことにはおかまいなしに、ご飯をもらい終わると、さっさとこの場を去ってしまった白猫のげんきんさの対比がなんだか笑えてきてしまって、吹きだしてしまった。
すると、やはり同じように感じていたのか、織部さんもくすくすと笑いだす。
「猫ってげんきんだよね」
「そこがかわいいところでもあるんですけど」

そうだね、と顔を合わせて笑う。
弁当箱をかたずけて、またね、と白猫の消えた暗闇に向かって手をふる織部さんとともに、また歩き出す。
僕は、そういえば、と思いついて訊いてみる。
「織部さん、猫にまつわる話って聞いたことないかな？」
「猫の話、ですか？」
突然の問いに、きょとんとする織部さん。
「うん。人が猫になるとか、猫が人になるとか、そんなような話。昔話のようなものでもいいんだけど、できればこのあたりに伝わる話でそういうのってないかな？」
唐突だよな、と思ったけど、織部さんは不審がらずに小首をかしげながら考えてくれる。
「猫の話ですか。わたしが知っているのは、よく聞く昔話ぐらいです。百年生きた猫はネコマタっていう妖怪になるとか、ネズミに騙された猫が十二支に入れなかったお話とか」
僕もその二つの話は知ってる。ネコマタについては、みなもの症状に少し似ているかもしれないと思って、僕も考えたのだ。しかし、猫がネコマタになるとはちがって、みなもは人間なのに猫になりかけているのだ。状況が違う。
僕の顔に、残念そうな気持ちがにじみ出てしまったのだろうか、織部さんが、
「すいません。お役に立てなくて」
と頭を下げる。
「ううん。いいのいいの。たいしたことじゃないから」
僕は努めて明るい顔を作って、首をふってみせる。
そんな僕に、織部さんはもう一度、ごめんなさい、とあやまったけど、ふいに、そういえば、と顔をあげる。
「猫の話ではないのですけど、このあたりに伝わる話ならひとつ知っています」
「このあたりの？」

猫が出てこないのなら、直接的には関係ないのかもしれないけど、情報はなるべく多く集めておきたい。
「はい。わたしは、高校に入る前にこの町に引っ越してきたので、昔からここに住んでいるみさきちゃ……川添さんに以前聞いた話なんですけど」
「聞かせてくれる？」
「はい」
川添さんから織部さんが聞いた話というのは、こういうものだった。
この町には？想いの丘？と呼ばれるちいさな丘がある。町の北側から中心ちかくまでぽっこりと盛り上がっている丘だ。織部さんが住んでいるニュータウンの名前にもなっている、この町のシンボルのような丘だ。その？想いの丘？が、何故、「想いの」という名前がつけられているかという話だった。
話自体は複雑というか単純というか。
遠い昔、このあたりに住んでいた豪族の姫が恋にやぶれて自ら命を散らしたからとか、明治時代に自由にならぬ我が身を嘆いた女学生が集団自決をしたからとか、その昔ＵＦＯが落ちたのだとか、そこらへん、川添さんがいいかげんに話したらしいので、真面目に受け取るとばかばかしくてやってられないのだけど、とにかく？想いの丘？にはなにかそういういわくがあり、その因縁だか影響だかで、想いさえ深ければどんな願い事でもかなえられる、とううわさが昔からあるという、そういう話だった。
織部さんは、話しているうちに、あまりにも突拍子もないことを話していることに恥ずかしくなったのか、途中から申し訳なさそうな、消入りそうな、いますぐにでも止めたそうな声と表情で話していたけど、でも、その話を聞いているうちに、僕にはあながち的外れでもないように思えてきていた。
だってみなもは言っていたのだ。
猫になりたいと思った、って。

豪族の姫とかＵＦＯとかはともかく、その点は無視できない。
僕が思いのほか真剣に聞いているので、織部さんもほっとしたのだろうか、さらに話を続けてくれる。
「その？想いの丘？を奉っているらしい神社が、丘の森のなかにあるそうです。お祭りも開かないから寂れていて、まるでもう誰も管理していないような神社、って川添さんは言っていましたけど……」
「神社か……」
行ってみる価値はありそうだ。白猫がただの猫だった以上、なにしろ、手がかりがまったくない。豪族の姫に女学生にＵＦＯとなんだかうさんくささ満載だけど、行ってみない手はない。
考えながら歩いているうちに、僕と織部さんの分かれ道に差しかかった。
「参考になったよ、織部さん。ありがとう！」
分かれ道で立ち止まり、僕はお礼を言う。眉唾っぽいとはいえ、みなもの状態ともっとも合致している情報をもらえたのだ。だから僕は心からお礼を言った。
「い、いえ。少しでもお役に立ったのなら幸いです。……それから、今日は一緒に帰ってくれて、嬉しかったです。ありがとうございました」
織部さんはカバンを持った両手を身体の前でそろえて、ぺこりと頭を下げる。
僕はあわてる。織部さんと帰れて嬉しかったのは、こっちこそなのだ。
けっきょく告白の返事はしそびれてしまったけど（僕の落ち度だ！）、すごく、嬉しかった。
「ううん！　こちらこそありがとう！　……あれ？」
そのとき一瞬、既視感を得た。
あれ？
以前にもこんな場面があったような。
「……どうかしましたか？」

あれ？　と首をかしげたまま動きを止めた僕に、不思議そうな顔を向ける織部さん。
「え。あ、その、昔、やっぱり織部さんとこんなことがあったような……」
「えっ！？」
織部さんが驚いた顔になる。
「あ、ごめん。たぶん、デジャヴュってやつだと思う。ごめんね、変なこと言って」
「あ、いえ。その……」
ちょうどそのとき、路地に大型のトラックが入ってきた。僕と織部さんが分かれ道に立っていては、トラックは通れない。
「織部さん、それじゃ、また」
「あ。はい、失礼します」
織部さんはもういちど頭を下げると、トラックに道を空けようと急いで路地を曲がっていく。とてとてと走るその姿もまた、小動物ちっくでかわいい。
僕も急いで道を空けながら、考える。
織部さん、そういえば別れ際になにか言おうとしていたみたいだけど、なんだったのかな。
そう思いつつ、焦りは感じなかった。
今日は織部さんとたくさん話すことができた。少しは打ち解けられたと思う。次に織部さんと話すときには、きっともっと打ち解けて話すことが出来るだろうと思う。というか、そう努力したい。だから、そのうちまた話す機会もあるかなと思ったからだった。

（9）へ続く

9／20

（9）

ちか――織部ちかは、夜道を家に向かって歩きながら、嬉しくてくちもとがほほえむのを止められなかった。
夏目くん……ナオくん、わたしのことを少しだけど憶えているみたい。わたしのこと、全然わからなくたっておかしくないのに。
それなのにナオくんは、記憶のどこかに留めてくれている。
まさか憶えてくれているとは思っていなかったちかは、ふわふわと夢心地だった。
嬉しいな。
嬉しいな。
足取りが弾む。
あ。でも……。
ぴたりと足が止まる。
もしかして思い出してもらえたとして、それはいいことなのかな？
一瞬のうちに、夢心地が不安に変わる。
だってあのころのわたしといったら……。
心が沈みかける。
でも。
「ううん」
すぐにちかの心と表情はおだやかなものになる。
あのころのことは、いい思い出。
そこにはナオくんがいるんだから。
ナオくんがいい思い出にしてくれたんだから。

ちかがナオと出会ったのは、実は高校に入ってからではなく、小学校三年生の冬のことだった。
十二月の半ば。街中はクリスマスイルミネーションでいっぱいで、クリスマス商戦も本番を迎えつつある、そんな時節だった。
そのころちかは病院に入院していた。
この想いの丘ニュータウンの病院ではない。もっと遠くの、海辺の町の病院だ。生まれてから中学三年生までちかたち一家が住んでいた町の病院だ。
ちかが入院したのは交通事故にあって怪我をしたからだった。居眠り運転でハンドル操作をあやまった車が歩道に突っ込んできたところにちかがいて、跳ねられた。ガードレールがクッションがわりになって衝撃がやわらげられ、さいわい身体は数箇所の打撲と擦過傷で済んだのだが、跳ね飛ばされたときに路面で頭を打ってしまい、出血も多かった。すぐに救急車で病院に運ばれ傷口の縫合が行われ、命に別状はなかったが、後遺症を懸念しての検査のために、ちかは数週間の入院をすることになった。
入院して一週間。検査で異常は発見されず、傷口も順調に回復していったが、ちかはもう学校に行きたくないと沈んだ気持ちでいた。誰にも会いたくなかった。クラスの代表で見舞いに来たクラス委員たちにも、仲のいい友達にも会っていない。
それは、頭の傷口を縫合するために、髪を剃ってしまっていたからだった。
治っても髪が生えるまで学校に行きたくない、と親に言うと、命が助かっただけでもよかったのよ、とやさしく諭す。
でも坊主頭のままで学校に行けば、クラスのいじわるな子たちを中心に、かっこうの笑い者になることがちかにはわかっていた。
もともとそういったいじわるな子たちに、チビ、どんくさい、本ばっかり読んでいて暗い、と蔑まれることがよくあるちかだった。だから、そのうえ坊主頭のままで学校に行ったりしたら、たぶん、こっぴどくいじめられるようになる。ちかには、その光景が手に取

るように予想できた。
ただでさえ坊主頭なんて年頃の女の子にはつらいのに、学校に行けば最悪の未来が待っている。父親も母親もやさしいけど、きっといじめられるから学校に行けない、なんて、病院に駆けつけてきてちかが無事だとわかったときに人目もはばからず大泣きした両親には、なんだかささいなことでわがままを言うようで、申し訳なくって口に出来ない。
だからちかは、ひとり不安を抱え込んだままふさぎこんでいるしかなかった。
そんなちかの入院中の唯一の楽しみは、よく日の当たる休憩室での読書だった。休憩室は中庭に面した東側の壁が一面ガラス張りで、そのガラス張りの壁の横にちょこんと置かれたソファがある。物語の世界に没頭しつづけて、ふと目を上げたときに、そこに明るい中庭を見てほっと一息できるその場所が、ちかのお気に入りだった。
休憩室は病棟に入院している患者たち専用の場所だったから、知り合いに会うことはまずなく、ちかは安心して、何時間もそこにいることができた。みな患者だから、ここでは、お互い、誰かが誰かを笑うこともありえない。
ちかは、遠からず直面するであろうつらい現実を心の底に押しやるように次々と頁をめくり、物語の世界に没頭していた。
しかしそんな場所でも、傍若無人にふるまう人間はいる。
ちかと同じ年か、それともひとつくらい上だろうか、足を骨折して松葉杖を付いた少年がいた。わがままいじわるを絵に描いたような身体の大きな少年で、その少年が入ってくると、誰もが一瞬のうちに緊張した。静かに交わされていた談笑が止み、おだやかだった休憩室の空気が張りつめて、静まりかえる。少年は入り口に立つとじろじろと休憩室内を見まわし、気の弱そうな老人や婦人に狙いを定めるや、隣に座って、病状に関する心無い質問を繰り返す。ジイさんバアさんと不遜な口の利き方をし、へえ、それじゃもうそろそろヤバイね、なんて言葉を平気で口にする。老人たちが集まって観

ていたテレビのチャンネルをなんの断わりもなく変えるし、誰かが注意をすれば、うるせえこのくたばりそこない！　などと罵倒し、機嫌が悪くなればくずかごを松葉杖で蹴飛ばしたり自動販売機を殴ったりする。

若い大人の男性がいれば少しはおとなしくしていたのだろうけど、ちかが入院していたころは病弱そうな老人と女性ばかりだったから、誰も少年に逆らうことが出来なかった。

ちかはというと、同じ年頃ということで、目をつけられているのがうすうすわかっていたから、その少年が休憩室に現れたときは、何気なさをよそおいつつも急いで自分の病室に戻るようにしていた。

目を合わさないようにして少年の横を通って休憩室の外に出るとき、あからさまな舌打ちが聞こえることもあった。これは、隙を見せたらからまれる。だからちかはいつも用心をしていた。

しかし、ある日、とうとう少年に捕まった。

小説に夢中になりすぎて、その少年が休憩室に入ってきたのに気がつけなかったのだ。

開いている本に、いきなり影がかかったので、顔をあげると、少年がいた。

ちかは顔をあげたまま動けなくなった。

そんなちかに、少年は残忍な笑みを浮かべた。

「よお、ハゲ女。お前、女だよな」

同年代だからだろう。いままで以上に遠慮のない、侮蔑的な言葉をいきなり少年は吐いた。

ちかはなにも答えられなかった。

なんの罪もないのに理不尽にぶつけられる悪意に、ちかの心はすくみあがった。

まわりに助けを求めることも出来ない。

もし周りを見まわすことが出来ても、誰もこちらに目をむけてくれていないだろうことは、経験からわかっていた。

自分もいままでそうだったから。怖くて、自分に害が及ばないよ

うにと祈るのが精一杯だったから。
「おい。なんか言えよハゲ」
無視されたと思ったのか、少年の声にいらだちがまじる。
はい、と返事をしようと思ったが、恐怖に身体が固まって、口が動かなかった。
それに、もちろん、ハゲ、と侮蔑されたこともちかの心を傷つけていた。それこそが、いまのちかの心を傷つける一番残酷な言葉だったから。その言葉を投げつけられるのが怖くて、心が引き裂かれるのが怖くて、学校に行く日を恐れていたのだから。
少年もまた、その言葉が一番ちかを傷つけることに気づいているようだった。
「よおハゲ。なあハゲ。なんでお前女のくせにハゲなの？　どっかで転んで頭でもぶつけたのか？　なあハゲ？　だっせえなお前。ブスでチビでハゲなんて最悪だな、ハゲ」
ちかは何も言えない。ただただ、傷つき血を流す心を抑えて、少年という悪意の台風が過ぎ去るのを待つしかなかった。
「なあハゲ、お前いつもここで本読んで、おもしれえのかよ。性格まで暗いなんてほんとゲロ最悪だなハゲ」
目に涙がたまってきた。自分のことが、本当にみじめに思えてくる。
性格が暗くて、チビで、ブスで、ハゲで……。
「おい！　いい加減何とかいったらどうだよ、このハゲブス！」
もうだめ……。
ちかが泣き崩れるその寸前だった。
「何言ってるの。かわいいよ」
突然、まだ声変わりのしていない高めの少年の声が休憩室に響いた。
そしてその声の主、ちかや松葉杖の少年と同じ歳ぐらいの細身の少年が歩いてくる。
「なんだお前」

「夏目直」
そう名乗った少年――夏目直（なつめなお）――ナオは、ちかをかばうように、松葉杖の少年とのあいだに割り込んだ。
松葉杖の少年は、思わず後ろに下がる。
まっすぐに目を見つめてくるナオに、松葉杖の少年は気圧される。しかし気圧された自分が悔しかったのか、ずいっと一歩踏み出して、ナオをにらみつけて言う。
「お前頭おかしいんじゃねえの？　だってこいつハゲだぜ。ハゲがかわいいわけないじゃん」
ナオは目の前で威圧する松葉杖の少年に一歩も引かず言い返す。
「ちがうよ。髪がないから本当のかわいさがわかるんだよ」
「なに言ってんだ、お前」
「目鼻立ちのこと。髪がないのにかわいいってことは、本当にかわいい証拠なんだよ」
松葉杖の少年にはナオの言うことがよく理解できないようだったが、ナオの、自分が正しい、と信じるまっすぐな目に、思わず身体が逃げ腰になる。
「ばっかじゃねえの。こいつのどこがかわいいんだよ」
それでも負けじと少年は言い返すが、ナオもまったくひかない。
「かわいいよ。でもそんなことより、人間、顔じゃないんだよ？大切なのは心だもん。お前、女の子をいじめるなんて最低だよ」
「なんだと？」
少年の身体に怒気が膨れ上がり、いまにもナオに殴りかかりそうになる。
しかしナオもまたそこを一歩も動かない。
しばらくにらみ合いが続く。
松葉杖の少年は、ナオが左腕を包帯で吊っているのをちらっと見る。
自分が怪我をしているのは脚だ。
どっちが有利か計算したのだろうか、やがて、

「けっ。かっこつけてんじゃねえ、ばーか！」
捨て台詞をはいて、松葉杖の少年は休憩室を出て行った。
休憩室全体に、安堵のため息がもれる。ちいさく手を叩く老人もいた。
ナオは、おさわがせしました、と休憩室全体に頭を下げた後、
「ここ、座ってもいい？」
と、まだ固まったままでいたちかに訪ねた。
ちかが、ぎこちなく、なんとかうなづくと、
「ありがとう」
そう言ってナオはちかの座っているソファのとなりに腰を下ろした。ちかの座っているソファは、もともと三人がけだから、ふたりで座っても、不躾な距離にはならない。
ちかはナオがなにか言うかと思って、どきどきした。
助けてくれた少年に、なんてお礼を言おうかと考え、緊張してそれだけで頭に血が上った。
が、ナオはソファに腰を落ち着けると、とくにちかには何も言わず、吊っている左腕の包帯の隙間から文庫本を一冊取り出して開き、器用に右手だけで本を支えると、読み始めた。
どきどき。
どきどき。
どうしよう。
どうしよう。
なにか言わなくちゃ。
お礼を言わなくちゃ。
ちかの心臓は高鳴ったが、ナオはあれっきり小説に没頭している。
ちかのことはすっかり忘れて物語のなかに入り込んでいるらしく、声をかけるタイミングがつかめない。
やがて、それから一時間も経ったころだろうか、ナオが本から顔をあげ、んーと自由になる右腕で伸びをして、中庭に目を向ける。
そのひょうしにちかが本を開いていないのに気がつくと、ナオは

気さくに話しかけた。
「ここ。いい場所だねー。すごく落ち着く」
いきなり話しかけられたので、くちのなかがからからに乾いていたちかは声を出せず、かろうじてうなづいた。
ぎこちなく首を動かして、ちかはナオを見た。さっきあの粗暴な少年に一歩も退かなかった凛々しさがうそのようなやさしげな面持ちの少年だった。ちかは勇気をふりしぼり、こくっとつばを飲み込むと、声をかけた。
「あの。さっきはありがとうございました」
ナオはきょとんとしたあと、ああ、と笑う。
「なんか頭にきちゃって。思わず」
ぽりぽりと頬をかきながら照れくさそうにナオは答える。
「だってさ、あいつ言ってることめちゃくちゃなんだもん」
照れくさそうにしていたと思ったら、今度は、まったく、とほおをふくらませる。表情がころころ変わるナオを見ていると、ちかの心も軽くなってくる。
ちかは助けてもらってうれしかったけど、ひとつだけ気になっていたことを思いきって言ってみた。
「あの。でもかわいいっていうのは、言いすぎかも」
「そんなことないよ。かわいいよ！」
ナオはすぐに否定して、じっとちかの顔を見つめる。
かわいいとは言われても、丸刈りの頭は気になるし、いままで自分のことをかわいいだなんて一度も思ったことのなかったちかは、ナオの視線に耐えられず真っ赤になって下を向いてしまう。
「あ、ご、ごめん。じっと見たりしちゃって」
ナオはそんなちかの様子に狼狽してあやまる。それから、
「えっと、僕、今日からここに入院することになった夏目です」
あらためてそう名乗った。
ちかも顔をあげて、名乗り返す。
「わたし、小林です」

「小林さん、しばらくよろしく」
「こ、こちらこそ」
お互いの挨拶が終わると、ふと、ナオが休憩室の壁にかかっている時計を見て、あっ、と声をあげる。どうやらなにか用事があるようだった。
ナオはちかに訊ねる。
「また来てもいいかな。ここ、居心地いいから」
「も、もちろんです」
上ずった声でちかが答えると、ナオはにこっと笑う。
「よかった。本の感想の話もしたいんだ」
「え？」
「ほら、見て。気がつかなかった？」
ナオがちかに見せた文庫本は、いまちかが読んでいる小説と同じものだった。『泣き虫ホーリーの冒険』。一昔前に流行った魔法使いの少年が主人公のファンタジー小説。ちかが持っているのはハードカバー版だったから、同じ本を読んでいるとは想像もしなかった。それどころではなく緊張していたし。逆にナオのほうは、ちかの持っているのがハードカバー版だったから、すぐに本のタイトルを目に出来たのかもしれない。
「ね？」
ナオがにこっと笑う。
「ほんとだ。偶然ですね」
ちかも笑うと、ナオはわざと未見にシワをよせ、太い声を作ってみせ、
「いやいや、これは運命ですよ」
とその小説に出てくる大賢者の物まねをしてみせる。
「……」
ぽかん、とするちか。
そんなちかを見て、やっちゃった、と後悔に頬を赤らめるナオ。
その恥ずかしがるナオを見て、ちかがぷっと吹き出す。

吹き出したちかにつられて、ナオも笑う。
「それじゃ、また……明日？」
「はい。また明日」
ナオはそう言ってちかに手をふり休憩室を出て行った。
これがちかとナオの出会いだった。

それからちかとナオは、毎日のように休憩室の中庭近くのソファに並んで座り、小説を読んだりその感想を言い合ったりして過ごした。それは実際にはわずか二週間にも満たない短い時間だったが、ちかにとっては永遠にも一瞬にも思える、まるでこの世とは思えない不思議な時間で、そしてそんな夢のような時間のなかで、ちかはナオに恋をした。
ナオは彼が自分で言ったとおりに、ちかの丸刈り頭のことをまるで気にしなかった。女の子として、どうでもいいってわけではないのだ。なにかのひょうしに手と手が触れでもすれば、照れ笑いを浮かべたりするのだから、ちゃんとちかを女の子として意識したうえで、気にしていなかったのだ。
そのことは、ちかに自信をもたせた。自分は本当はかわいいのだ、ということにではない。大切なのは心だ。それを信じていれば、いつかは必ずナオくんのようにわかってくれる人にもっと会えるっていうことに。
もちろん、ちかだって女の子だから、かわいい、って言ってくれたことも信じたかったけど、毎日鏡を覗いても、そこには無残な丸刈り頭の自分がいるだけで、こればかりはなかなか信じられなかったけど。
ちかが、学校に行ったら笑われるかも、って悩みをもらしたときには、ナオはこう答えた。
「本当の小林さんを知らないひとのことなんて、気にすることないよ。学校には人がいっぱいいるからわかってくれないひともきっと

いるけど、わかってくれるひとだっていっぱいいるはずなんだから」
ちかはそれでもやっぱりふっきれなかった。
「でもわたし、くじけちゃうかもしれない。わたし、チビだし、どんくさいってよく言われるから。それなのに、今度はこんな頭を見られたら……」
「ちいさくたっていいじゃない。僕の友達にものんびり屋がいるけど、どんくさくたっていいんだと思う。自分のペースでしっかり歩んでいけば。あと顔なんて飾りなんだし、髪だって生えてくるんだから、全然気にしなくていいと思うな」
「飾り……やっぱり、かわいい、言ってくれたのは、嘘だったんだ……」
「ち、ちがうよ、それは本当。でもさ、ほんと大事なのは心だから。それだけはほんとだから」
ナオの行動はナオの言っていることを裏切っていなくて、それはちかに勇気を与えた。
ちかは高校生になったいまでも、地味で目立たなくて、とくにかわいい顔をしているとは思っていないが、あのころ、手術跡のまだ髪の少ない頭で人前に出る勇気をくれたのは確実にナオだった。
ちかが思ったとおり、退院して学校に行ったところ、いじわるな子たちにさんざん、ハゲハゲとからかわれたけど、ちかがくじけず笑っていられたのは、ナオのおかげだった。
それは、ナオの言葉に触発されてがんばったちか自身の成長ではあったが、ちかはそれをふくめてナオに感謝をし、そしてますます彼に対しての想いを深めた。
しかし、ちかが退院して学校に通えるようになったころには、ナオはもうちかの近くにはいなかった。
もともと軽い骨折だったナオはちかよりも先に退院し、さらにこの町からも引っ越して行ってしまったからだった。
ナオがどこに引っ越していったのか、ちかは知らない。
あれほど仲良くしていたのに、お互い住所を聞けなかったのは、

あまりにも仲が良かったがゆえの若気の至りなのだろう。
楽しい、夢のような時間の最後は一二月二四日。
折りしもクリスマスイヴ。
「これ。クリスマスプレゼント。僕、いまほかになにも持ってないから……」
退院するナオを病院の玄関まで送りに来たちかにナオが渡したのは、二人が初めて出会ったときに二人とも読んでいた、あのファンタジー小説の文庫本だった。
「小林さんが読んでいたのって、図書館から借りた本だったでしょ？　だからどうかなって思って」
ナオは少し悔しそうだった。もっといいものを渡したかったのに、という想いが表情に思いっきり浮かんでいた。
でもちかとしてはこれ以上にない嬉しいプレゼントだった。
二人の始まりのときを一緒に過ごした本。二人が一緒にいた記念としてこれほど素晴らしいものはなかったから。
むしろちかのほうが悔しかった。
気の利いたプレゼントがなにも思いつかなかった。
お別れなのに。
もう二度と会えないかもしれないのに。
「あの。わたしからは、これ……」
それでも一所懸命考えた最後のプレゼントを、ちかはナオに差し出した。
使い古した革製の本の栞。
ちかが大事にしていたお気に入りの品ではあるけど、他人からみたらただの古びた革っきれにしか見えないしろもの。
ううん。やっぱりこんなのだめだ。ナオくんに、嫌がられちゃう！
そう思って、
「あの――」
やっぱりごめんなさい、と引っ込めようとしたとき、
「ありがとう！　大切にする！」

ナオはちかの手から大事そうにその栞を受け取った。
使い古しだからって、嫌がっている様子はまったくなかった。本当に嬉しそうに、ナオの本をもらったちかと同じくらい嬉しそうに、ナオはほほえんだ。
そこで、ナオに声がかかった。
迎えの車が来たのだった。
ナオはぺこりと、迎えの車から降りてきた年配の男女に向かって頭を下げる。どうやら迎えに来たのは親ではなさそうだった。年配の男女は、病院の玄関まで迎えに来ようとはせず、腕時計とナオをちらちらと交互に見ながら車のわきで待っている。
「それじゃ、行くね。いろいろありがとう。小林さんと話せて、とても楽しかった」
「い、いえ。わたしこそたくさんお話できて嬉しかったです。……それから、助けてくれたことも、はげましてくれたことも、とても嬉しかったです。ありがとうございました」
ちかは本を持った両手を身体の前でそろえて、ぺこりと頭を下げた。
ちかが頭をあげると、ナオはなにか言いたげにちかを見つめていた。
ちかももっとなにか言うことがあるような気がして、焦る。
そのとき、車のクラクションが鳴った。早く来い、ということらしい。
ナオはあわてて、やはりナオを送りに出てきてくれていた担当の看護士さんに頭を下げると、
「また、いつか会おうね！」
ともう一度ちかの目をまっすぐ見つめて言うと、きびすをかえして、迎えの車に向かって歩き出した。
「は、はい！　またいつか！」
一拍おくれて、ちかもナオに言い返した。
ナオはふりかえり、嬉しそうに笑って手をふった。

そうして、ナオはちかの前から去っていった。

それから数年が経ち、ちかの両親は円満にではあったけど離婚をして、ちかの名字は小林から母親の旧姓である織部に変わった。もちろん髪は生え、もとの地味で目立たない本の好きな、でもいつでも心は前向きでいられる少女にちかは成長した。

やがてちかの高校受験を転機にちかとその母親は想いの丘ニュータウンに引っ越してきて地元の高校に入学、そして二年に進級した春、ちかはもう二度と会えないだろうと思っていた初恋の少年と再会した。

（１０）へ続く

10／20

（10）

「手袋はＯＫ？」
「お～！」
「帽子はかぶった？」
「お～！」
「それじゃ行こうか」
「お～♪」
みなもは元気よく手を突き上げて上機嫌に歩き出す。
昨夜は大変だった。
学校に連れて行かなかったものだから、みなもはすねまくっていた。
なにを言っても、にゃー、としか答えない。
一瞬、まさか猫化が進んで人間の言葉をしゃべることができなくなったのかとあわてたけど、そうじゃないことは、みなものすねている表情でわかった。
ファミレスに行くのではなく、お弁当を買ってきてしまったこともみなもの機嫌を損ねた。わざわざみなもの好きな、とりからのり弁当を買って帰ったのに、このところ何故かファミレスのメニューをはやく消化することにご執心のみなもは、不満のにゃーを返すだけだった。ちゃんと食べたけど。
想いの丘にまつわる話や、丘にある神社に行ってみようという提案にも、にゃーとしかみなもは答えず、一日くらい学校に行けなかったのがなんでそんなに不満なんだろうと僕は不思議に思い、明日神社にちゃんとついてくるだろうかと少し不安になりもしたのだけど、そこはみなも。一晩寝たら昨日の不満はさっぱり忘れて上機嫌。

いつまでも根に持たないのはみなものいいところだ。悪く言えば、単純、忘れっぽい、って言い方もみなものには当てはまるんだけど。僕に注意されたこととかも一晩で忘れるしなぁ……。

とにかく朝みなもの家を訪ねると、昨夜のすねっぷりが嘘のように上機嫌だった。

神社、どんなところだろうね、なんてむしろわくわくしている様子。学校休んで行くことになるんだけど、いいの？　と訊いても、うん、だってナオちゃんと一緒だもん、とあっさり。どうやら昨日も学校自体はどうでもよかったらしい。生まれたころからずっと一緒にいるのに、いまさらなにを言っているんだか。

学校には病欠の電話を入れた。みなもの欠席理由を風邪にしておいたので、それが僕にもうつったことにしておいた。

そして、クラスメートや先生に行きあってしまわないよう学校の登校時間から充分経った午前九時三〇分を過ぎてから、僕たちは想いの丘に向かって出発した。

想いの丘は僕たちの家から歩いていける。散歩がてらにゆっくり歩いても一五分かからない。そこからさらに町を見下ろすことのできる頂上付近の見晴らしまでも一〇分程度。子供でも老人でも気軽に散策を楽しむことが出来る。

僕とみなもは、通勤通学が一段落した静かな住宅街をのんびりと歩く。

もっとも、みなもと一緒にいてのんびりしていなかったことなど、さっぱり思い出せないのだけれども。

「静かな住宅街って、ちょっとわくわくするね」

みなもが後ろ手にスキップするように歩きながら言う。

僕も同意する。

「わかるわかる。誰もいない町っぽくて、ちょっとジュブナイルＳＦみたいな感じでしょ？」

「そうそう！」
みなもは、両手が猫の手になり、頭には猫耳が生えている。今日はなにも変化がなかったようだけど、とんでもなく異常な状態だ。でも、みなもと話していると、どうにもせっぱつまった気持ちになれない。だってそもそもの当事者であるみなもが、まったくあわてていないばかりか、猫になることをかわいいからと喜んでいる節まである――というかあきらかに喜んでいるものだから。異常事態を前に、焦らず平静でいられていると言えば聞こえはいいけど、実際、これはいいことなのか悪いことなのか。
僕にはとうていいいことには思えないんだけど。
となれば、僕だけでもちゃんとみなものことを考えなくては。
思いを新たにし、自分を鼓舞するように僕はみなもに言う。
「よし、みなも。今日こそはがんばってもとにもどる手段を見つけるぞっ！」
しかしみなもは僕の突然の意気込みにきょとんとしたあと、こらえきれないといった様子でくすくすと笑う。
「急にどうしたのナオちゃん。ナオちゃんに熱血って似合わないよ？」
うるさいな。
みなもが真剣にならない分、僕ががんばろうって決意しているんじゃないか。まったくもう。

というわけで僕はみなもののんびりペースと戦いながら、似合わぬ熱血魂を燃やそうと努力してみたわけなのだけど、織部さんが川添さんに聞いた話に出てきたらしき神社は、なかなか見つけることが出来なかった。
たしか、神社は想いの丘の森のなかにあると織部さんは言っていた。想いの丘は、頂のあたりは緑の芝で見晴らしがよく、そこに登るまでの山道が森に覆われている。森、といっても林に毛が生えた

程度のものでそれほど深いものではなく、山道も、老若男女誰でもが歩ける程度のハイキングコースみたいなものだ。僕とみなもはそのハイキングコースを端から端まで歩きまわった。いくつかある道の分岐も、残らず歩きまわった。

しかし神社らしきものは影もかたちもない。

しかたがないので、思いきって、ハイキングコースから外れた、山道や私道というよりは獣道といったほうがいいような雑木に囲まれた道をも、枝葉を腕でのけながら歩いたりもした。

しかし発見できたのは古びたちいさな廃屋がひとつだけで、やはり神社らしき建物は見当たらなかった。

丘の頂にも登ってみた。

しかし、頂から三六〇度森を見下ろし透かしてみても、それらしき建物の影は見当たらない。

やがて正午を過ぎ、午後一時、二時を過ぎたところで、僕もみなもも疲れで気力が果てた。なにより、昼食もとらずにちいさな丘とはいえ山道を歩きまわったのが効いている。食は人間の根源的な活力だと思う。

「ナオちゃん」

「うん？」

「おなか、ぐー」

「うん」

僕たちにはもう、このあともまだ神社探しを続行するか否かを決める気力さえもなかったので、ともかくふもとに下りてなにかを食べることにした。

へとへとの僕とみなもは、もう口もきかずに山道を降りていく。

と、その途中だった。

巫女さんがいた。

白い和服に緋色の袴。

まちがいなく巫女さんだ。

とてもちっちゃいけど、巫女さんだ。

ランドセルを背負っていて小学生にしか見えないけど、巫女さんだ。
……ってランドセル？　小学生？
巫女服の白と緋色の袴に、妙にマッチした赤いランドセル。
髪を左右ふたつのおさげに結わったかわいらしい顔立ちの、少女？　幼女？　とにかくちっちゃい巫女さんは、僕とみなもが見つめるとじろりと見上げてきて、歳に似合わぬ生意気な口調で僕たちに問うた。
「なんだ、お前たち。わたしに用でもあるのか？」
「え、う、うん。たぶん……」
いきなり訊かれてくちごもってしまった。この子が本当に巫女なのなら、おそらくはこの丘にあるという神社の関係者だろう。だったら用があるのはまちがいないのだけど、なぜそれがわかったのだろうか。
小学校三年生か四年生くらい、それ以上には見えないランドセル巫女は僕の答えを聞くと急に笑顔になる。
「おお。あてずっぽうに言ったのだが、本当にそうだったか。ささ、神社はこっちだ。ついてくるがいい」
あてずっぽうだったらしい。
ランドセル巫女少女は、山道を外れ、ずかずかと獣道に入っていく。僕とみなもが顔を見合わせていると、
「なにをしている。早く来い」
ランドセル巫女にどやされ、思わずせかされるままにあとを追いはじめた。

（11）へ続く

11／20

（11）

「客なんかめったに来ないからな。大歓迎だぞ」
途中からそうではないかと思い始めていたのだけど、そのランドセル巫女に連れて行かれたのは、午前中に一度目にしていたあの廃屋だった。
しかしどこを見ても神社らしき様子は見当たらない。
今にも崩れ落ちそうな平屋建てのちいさな廃屋がひとつ、そして、その横には廃屋の一部が壊れたような、焼け焦げた丸太や石材がごろごろと転がっているだけ。本殿どころか、鳥居さえ見当たらない。
「あの、ここが……神社なの？」
「そうだぞ。小姫神社だ」
「小姫神社？　わ、かわいい名前♪」
ここが本当に神社かどうかかなり疑わしいいま、名称などどうでもいいのに、みなもがかわいさだけに反応してはしゃぐ。
「そうだろうそうだろう。わたしの名前が小姫だからな」
ランドセル巫女は偉そうに、まだほとんど目立たぬ胸をそらし、満足気に答える。
その台詞にひっかかり、僕は訊く。
「きみが小姫だから、小姫神社？」
「そうだぞ。なにか問題があるのか？」
「いや、別に……」
この子の親が神社の名前から娘を名づけたのだろうか？　ともあれ問題があるのか、と訊かれれば、そこに問題があるのかどうかなど部外者の僕にはわからず、僕はすごすごと引き下がる。
なんだろう、この小姫という女の子、ランドセルをしょっている

ところからすると、小学生だろうに、妙に威厳があってなんだか逆らえない。よく考えると、巫女服にランドセルなんて、妙なコスプレって思えないこともないのに。
「ん？　まだなにかあるのか？」
じろじろ見てしまっていたのか、ランドセル巫女――小姫ちゃんが見上げてくる。
僕が首をふると、そうか、とうなづき、焼け焦げた木材や石材の積み重なっている一角を指差す。
「ほら。お賽銭ならそこだ。たーんとお布施しておくれ」
丸太や石材は、昨日今日崩れて積み重なったものではないようだ。木々の合間からは雑草が生え、石にはコケが生えている。この廃材が建物だったのは、もう十何年、少なくとも数年単位の昔だっただろうと思えた。
その廃材の重なった隅に、一膳用の丸いちいさなちゃぶ台が置いてあった。雨ざらしになっているのだろう、すっかり色あせていて、おそらく廃材と同じくらいの年月をここに放り出されていると思われるちゃぶ台だ。
そのちゃぶ台の上に、賽銭箱……を模したおもちゃの貯金箱が置いてあった。寺社が多くて有名な旅先のお土産屋さんでよく売ってそうな、安っぽいプラスチックの貯金箱……。
「どうした？　ほれ、ちゃっちゃとたんまりお布施をするといいぞ」
小姫ちゃんは、さあ早くしろ、とばかりに僕とみなもをせかす。
「いや、でもこれって……」
「貯金箱？」
僕とみなもは顔を見合わせて首をかしげる。
財布を開かない僕とみなもの様子に、じれたように小姫ちゃんが言う。
「なんだ？　お布施しないのか？」
「いや、だって……」
からかわれているのだろうか。

それともお小遣いが欲しい小学生の、たわいのないいたずらなのだろうか。
戸惑う僕たちに、小姫ちゃんは露骨に眉をひそめる。
「なんだ冷やかしか。なら帰れ帰れ」
急にそっけなくなって、小姫ちゃんは僕たちを追っ払うようにぞんざいに手をふる。
なんというか、げんきんな子だ。
小姫ちゃんはそのまま廃屋のドアをがたがたと引き開けて中に入っていこうとするので、僕はあわてて呼び止める。
「待って待って」
「なんだ。まだ用があるのか？」
いちおうふりむいてくれるが、すでに興味を失ったそっけない口調で答える小姫ちゃん。
「ご両親はいないのかな？」
妙に堂々とした子なので思わずペースに乗せられてしまっていたけど、本当にここが神社――小姫神社というかどうかはともかく――ならば、小姫ちゃんの親あるいは保護者である神主がいるはずだろう。そう思い僕は訊いてみる。
が。
「そんなものはいないぞ。ここにはわたしひとりだ。わたしがひとりで管理している」
「え？」
「小姫ちゃん、ひとりなの？」
僕とみなもは驚く。
ひとり暮らし？　こんなにちいさな子が？
僕とみなもは、幸か不幸か（幸だと思っている）後見人があまり真面目でなくほったらかしてくれているので、まだ高校へ通う身ながらひとり暮らしが成立しているわけなのだけど、こんなちいさな子のひとり暮らしって許されるのだろうか？　児童保護の法律とか、そういうのがあるんじゃないのかな？

とかなんとかよそ様の事情にいらぬ懸念をしている僕の横で、みなもは小姫に難癖をつけられていた。
「?ちゃん?をつけるな、?ちゃん?を。わたしのことは、姫、と呼べばよい」
姫って。
それは果たして呼び捨てていい、という気安さの表明なのだろうか。
「あるいは、?さま?づけでもいいぞ」
やっぱり、気安さの表明ではないらしかった。
まあ、それはそれとして。
「それじゃ、その、姫。きみがここの管理人なら――というか、ここ、本当に神社なんだよね?」
「なぜに疑う」
「いや、だって。鳥居も建物もないし」
僕の懸念を小姫ちゃん（心のうちならこう呼んでもいいだろう）は笑い飛ばす。
「あんなものは飾りだ。わたしがいればことは足りる」
いや、飾りってことはないと思うんだけど。
僕はなんだか途方にくれてしまう。
僕はいま、とんでもなく無駄な時間を過ごしているのではないだろうか……。
いやしかし、午前中からいままで、これだけ探してほかに神社は見つからなかったのだ。そして、このランドセル巫女の小姫ちゃんは、神社はここで、ここを管理しているのは自分だという。
正直、なんだか子供のおままごとに付き合わされているような虚脱感があるにはあるんだけど、でも、小姫ちゃんが巫女服を身に着けていることだけはたしかなんだよな。って、そういえば小姫ちゃんってあの姿で小学校に通っているんだろうか……いやまあ、それはいいとして、僕は「巫女服を着ている」ってところだけに一縷の望みをかけて、小姫ちゃんに訊ねる。

「あのさ。それじゃ訊きたいことがあるんだけど、いいかな」
「よくないぞ」
小姫ちゃんは即答。そしてとことことちゃぶ台に据えてある貯金箱――もとい賽銭箱の横に立ち、腕を組み仁王立ちになる。そして僕たちを無言でじーっと見つめる。
なにも言わないけど、言いたいことはよくわかった。
はぁ、とため息をついて、僕はその貯金箱――もとい賽銭箱に歩み寄った。
みなももついてきて、ふたりで財布を開き、お金を入れようとして――その貯金箱もとい賽銭箱が妙なつくりをしていることに気がついた。
「あの。これ、お金が入らないんだけど」
コインを入れるはずのスリットが、横には広いのだが異様に狭い。手に持った百円玉（十円玉だと気を悪くしそうなので奮発した）は、どう角度を変えても入らない。
僕にならって同じく百円玉を持ったみなもとふたり、小姫ちゃんを見上げる。
賽銭を入れるためにしゃがんだ僕たちを小姫ちゃんは横目で見下ろし言う。
「入らないなら入る金を入れればよかろう」
……つまり紙幣を入れろってことですか。
ああもう帰ろうかな、と一瞬思う。しかし、いまはみなもの猫化を直すための情報を少しでも手に入れなければいけないときだと思い直し、なくなくもう一度財布を開く。
取り出すのはもちろん野口さん。
僕たちは亡くなった両親の遺したお金で不自由なく暮らしているけど、大半の資産は成人しないと僕たちの自由にはならない。最近はずっとファミレス通いをしているけれど、普段はふたりで変わりばんこに自炊生活をしていてけっこう地道な生活をしているのだ。出費は押さえるに越したことはない。

何も考えずに諭吉さんや一葉さんが出てきそうなみなもの財布からも先んじて野口さんを引き出すと、一枚ずつ貯金箱もとい賽銭箱にお布施をする。
「……まあよいだろ」
僕たちの様子をうかがっていた小姫ちゃんが、やれやれといった様子でうなづく。
いや、二千円って、貧乏高校生にしてはそれなりに高額なんですが。
小姫ちゃんは、貯金箱もとい賽銭箱をひょいと抱えると、空いたちゃぶ台に腰を下ろし僕たちを見る。
「さて。訊きたいこととはなんだ？　わたしの好物でも知りたいのか？　そんなことならいくらでも答えてやるぞ」
なんでわざわざ二千円も出して今度来るときのお供え物リクエストなんかを訊かなきゃならないんだ。
「なにが好きなの？」
みなもも訊かなくていい。
「いちご大福。最近一番のお気に入りだ」
味と食感を思い出しているのか、目をつむりうむうむとうなづいている小姫ちゃん。
「いちご大福、おいしいね。うん、わかった。いちご大福、と。あとは？」
「みなもは黙ってて」
天然ボケ幼なじみを黙らせると、僕はいきなり本題に入る。まわり道はもう、さんざんしたような気がするし。
「想いの丘にまつわる伝承について、教えて欲しいんだ」
僕がそうくちにすると、小姫ちゃんの目がすうっと細くなる。が、それは一瞬で、すぐに平静な無表情になり、逆に訊いてくる。
「お前たちはどんなことを知っているんだ？」
僕は、織部さんから聞いた話を繰り返した。さすがにばかばかしいと笑い飛ばされるだろうかと思いつつも、ＵＦＯが落ちたなんて

うわさまであることも話した。
「うん。わたしも聞いたことがある話だな。よくある昔話に、都市伝説の類だ。どれも非現実的だがな」
話を聞き終えると、小姫ちゃんはあっさりとそう断じた。
「非現実的。そう思いますか？」
小姫ちゃんの返答は、背格好に似合わず、大人びた理知的なものだ。僕は思わず敬語になり、そう聞き返す。と、
「そうは思わないのか？」
またも小姫ちゃんは聞き返してくる。
「思いません」
これは試されているのだ。僕はそう直感的に感じていた。ここで引き下がるようなら小姫ちゃんからはなにも聞き出せない。
僕は賭けに出た。
小姫ちゃんが僕を試しているという読みが間違っていれば、僕たちは隠しておくべき秘密を赤の他人にもらしてしまうことになる。相手が小学生とはいえ、彼女のくちから風聞が広まれば、みなもになにか危険なことが起きるかもしれない。
しかし、ここはカードを切るべき場所だと僕は判断した。
だから、僕は、みなもに手袋と帽子を外させた。
腕は肘までまくってみせる。
左右の猫の手と、猫耳があらわになる。
みなもは毛に覆われているとはいえ素肌をさらして寒いのか、ぶるっと身体を振るわせる。
小姫ちゃんの表情は変わらなかった。
ただみなもを見つめている。
驚いてはいないし、ばかばかしいと笑ったり、からかっているのかと怒ったりもしない。
ただ、ぽつんと、
「願ったのか」
とみなもに問いかけた。

「うん」
とみなもは答えた。
小姫ちゃんはうなづき、
「ならしかたないな」
あっさりと言う。
「そっかあ」
みなももまたあっさりとそう納得する。
って、そうじゃないでしょ！
「あの、しかたないって、どういう……この現象について何か知っていたら教えてくれませんか。猫になるのを止める方法を何か……」
「止められん」
小姫ちゃんは一言で斬って捨てる。
「え？」
ついていけなくて聞き返した僕に、小姫ちゃんは繰り返す。
「一度願ったら、止めることはできない」
「そんな……」
僕はそのまま絶句する。
……ううん、いや待て。この子は本当に想いの丘の伝承について詳しいのか？　僕たちが驚きそうなことをいたずらで言っているだけってことはないか？
正直、小姫ちゃんの様子にふざけている様子がないことは自分でもわかっていた。でも僕には、問いかけるのを止めることはできない。みなもを助けることができないなんて事実を認めるわけにはいかない。だから小姫ちゃんを試すように訊いた。
「そもそも、想いの丘ってなんなんです？　みなもが猫になっていくのとどういう関係があるんですか？」
小姫ちゃんはもうもったいぶることはなく答えてくれる。
「その名の通りだよ。想いの叶う丘……いや、正確には、想いが？叶ってしまう？丘、だな。お前――みなもか。みなもは猫になることを願ったのだろう。だから、丘は、その願いを叶えている、そう

いうことだ。そして、一度願った願いは、叶うまで止まらない。つまり、叶ってしまう、だ」
僕はすぐに反論する。
「そんな……ううん、でもそれはおかしいですよ。この世の人、ううん、この町の人に限ったって、誰だって願いの一つや二つは持っているものでしょう？　その願いがすべて叶っていたら、この町はそれぞれの願いと願いが矛盾してぶつかりあって、大変なことになってるはずじゃないですか」
「想いの強さの問題だ。生半可な想いでは、想いの丘は願いを叶えぬ」
「みなもが、それほど強く猫になりたいと願ったということですか？」
「そういうことだ」
「どうして！」
「それはわたしに訊かれても困る」
「どうして！？」
今度はふりかえってみなもに訊く。
みなもは少し困ったような顔をしたあと、
「うーん。猫さん、かわいいから？」
なんて答える。
「かわいいから、ってそんなことで？　……そんなことで叶っちゃうんですか？」
後半は小姫ちゃんに訊く。
「すべては想いの強さの問題だからな。資質もあるが」
つまりそこまで強く、みなもは、「かわいいから猫になりたい」って願ったというのか？
人間の姿を捨ててまで？
そんなばかな。
「みなも、ふざけてる？」
僕はみなもに詰問するように詰め寄る。

みなもはやっぱり困った顔をし、でもきっぱりと、
「ううん。本当に、そう願ったよ、わたし」
そう答える。
「なんでそんなばかなことを……」
僕はがっくりとうなだれる。
みなもはそんなに人間の生活――ううん、僕との生活に不満を持っていたのだろうか。僕はなにか事件が起きるわけではないけど平和で平坦なみなもとの毎日に、けっこう満足していたっていうのに。
みなもの猫化が止められないということと同時に、僕にはそのこともショックだった。幼なじみのみなものことは、僕が一番よくわかっていると思っていたのに。
よほどひどい落胆ぶりだったのだろうか、小姫ちゃんがなぐさめるように声をかけてくる。
「まあそんなに悲観することもあるまい。願いが叶うのだしな。そもそも古今東西、獣化なんてものはだな――」
「あの、小姫ちゃん」
珍しくひとがしゃべっているのを遮ってみなもが小姫ちゃんに話しかけた。
「ん？　なんだ？　……ってだから？ちゃん？をつけるなというに」
小言を言いつつも、小姫ちゃんは気を悪くすることもなくみなもに向き直る。
みなもは僕を振り返り、後ろ歩きで小姫ちゃんに歩み寄りながら、僕に言う。
「ナオちゃん」
「うん？」
「女の子のお話」
「……わかった」
そんなときじゃない気がしたけど、ぼくはみなもと小姫ちゃんから少しはなれて後ろを向く。
みなもいわく、女の子には女の子にしか話せない秘密の話がある、

のだそうな。初めてそう言ったのは小学校五、六年生のころだっただろうか。ずっと家族のように育ってきたみなもにそう言われるのは少しさみしいものがあったけど、男の子にも男の子にしか話せない話があることにもうすうす気づき始めていたので、僕はうなづいた。それ以来、みなもが、女の子の話、と言ったときには、少しはなれて後ろを向くことが約束事になっている。

みなもと小姫ちゃんの内緒話が始まる。

みなもの声はぼそぼそとほとんど聞こえないけど、とくに声をひそめようとしていない小姫ちゃんの声は聞こうと思っていなくても聞こえてくる。

といっても、ふむ。まあ、そういうことだな。ん？　まあべつにそれはかまわんが。そうか、わかった、そうしよう、だがその場合、いやしかし、などと相槌を打つ言葉ばかりなので、話の内容はまったくわからなかったのだけど。

しばらくして二人の話は終わり、みなもが僕の元へ戻ってくる。

「話、終わったよー」

「なんの話だったの？」

「むー。だから、女の子のお話」

やはり気になるので訊ねてみるけど、思っていたとおり教えてもらえない。

小姫ちゃんはというと、腕を組んでなにやら考え込んでいたが、ふいに顔をあげると、僕に質問する。

「ナオ。お前はみなもが大事か？」

「え？　もちろんだけど」

僕は戸惑いながらも即答する。それはたしかなことなので、いまさら恥ずかしがったりしない。答えると、小姫ちゃんがその言葉の真意を確かめるかのように真剣なまなざしを向けてきたので、僕も真剣に見返す。

「猫は好きか？」

さらに小姫ちゃんが訊いてくる。

「好きだけど」
「ふむ」
小姫ちゃんはうなづき、
「まあ、お前たちなら問題ないだろ。仲良く暮らせ」
とあっさり話をまとめて、廃屋のなかに入っていってしまう。
「え？　ちょっと小姫ちゃん……！？」
僕があわてて廃屋に歩み寄ろうとすると、服の裾が引かれる。
「みなも？」
「ナオちゃん、おなか空いたよー。もう帰ろうよー」
みなもはもうすべて問題は解決したとばかりのさっぱりした顔、いや、さっぱりというか、おなかが空いてへたった顔で僕に言う。
「いやそれどころじゃないでしょ。まだ猫の――」
「いいのいいのー。ほら、もう、おなか、ぐ～って！　ぐ～って！」
みなもは駄々をこねる。
たしかに、小姫ちゃんからは、「一度願った願いは、叶うまで止まらない」というはっきりとした答えをもらった。そう答えられた以上、もう具体的になにか聞くことがあるわけじゃない。でも、こんなにあっさりあきらめていいことだとは、僕にはとうてい思えない。もう少し話を聞かせてもらって、なにか少しでも対処の指針が得られればと思うのだ。
そう考えるとあきらめがつかず、その場を動こうとしない僕に、みなもはわざとらしくため息をついてみせる。
「もお、しょうがないなぁ、じゃあ、見て見て」
「なに？」
みなもを振り返ると、その瞬間、ひょい、と猫耳が消えた。
「へ？」
「えへへ。かっこいいでしょー」
かっこいいという評価は当てはまらないと思うけど、みなもは得意そうだ。
「消せるの？」

「さっき小姫ちゃんに教わったの。油断するとまた出てくるけど」
「早く教えてくれればいいのに！」
油断すると出てくるということは、根本的な解決にはなっていないということだけど、これはこれで問題対処のひとつの方向性が見つかったことに違いはない。
「えへへ。あとでファミリーレストランで急に帽子とってナオちゃんのこと驚かせようかなあって思ってたの」
「余計なことを計画しない」
「てへへ♪」

それから僕たちは丘を降りて、いつものファミレスに入った。
山道をさんざん歩きまわった僕たちはすっかり疲れきっていて、夕方入店してから、そのまま晩御飯の時間まで居座ってしまった。
その間に、みなもは猫耳だけではなく、左右両手も人間の手に戻してみせた。
僕とみなもは人間への変化（？）が成功するたびに、周囲の客に気がつかれないようにひそかにはしゃいだ。　そのことで、僕はなんだか問題がすべて解決したような気分になってしまっていた。
願ったことは叶ってしまう、と小姫ちゃんは言った。
でもこうしてみなもは、人間の姿にもどることができる。
みなもの身に尋常ではありえない事態が起きているのはたしかだ。
でも意外と今日みたいに、そのうちあっさりと解決してしまうのかもしれない。
疲れていたせいかもしれない。人間にもどることもできるということで、とりあえず当面の心配が消えたことも大きかっただろう。
どうにもその日はもう、深刻な気分になることはできなかった。
わからないことはいっぱいあるし、問題はなにも解決していないのに。

（12）へ続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3302z/

こいねこ

2011年12月21日12時49分発行